

資料紹介

明治十年代 川村家の家計日記 ―「川村清雄関係資料」から―

落合則子\*

目次

はじめに

- 一、川村家の家禄奉還と東京還住
  - 二、入出金記録からみる暮らし向き
  - 三、日記に登場する親族の動向
  - 四、鬼籍に入る古老たち
  - 五、北の大地を目指して
  - 六、海外との通信
  - 七、印刷局関係
- おわりに

キーワード 川村清雄 秩禄処分 大蔵省印刷局 得能良介

はじめに

本稿は、江戸東京博物館所蔵「川村清雄関係資料」(以下「川村家資料」とする)のうち、「家計日記」(資料番号03001628)について、翻刻と解説を行うものである。

「川村家資料」には、幕臣川村家歴代による日記が伝わる。御庭番川村分家の初代修富をはじめ、二代修就・三代修正も、勤務上や家庭内で

の出来事を書き留めた。これらは、現在新潟市歴史博物館と江戸東京博物館に分かれて所蔵されており、目下確認できる日記の期間は、一部欠落はあるものの、安永七年(一七七八)から明治十年(一八七七)にまで及ぶ<sup>(1)</sup>。

このたび紹介する本資料は、他の日記と体裁や内容が異なるが、明治期に書かれた川村家の日記の一つとして位置づけることが可能である。表紙付和綴の堅帳で、全三一丁。「女房の夜業<sup>よじご</sup>」という題箋が付された明治九年刊行の市販の家計簿を使用している。筆跡と内容から、筆者は、川村婦元(修正の隠居後の号)と考えられる。明治十一年一月から同十五年十二月までを二ヶ月ごとにまとめ、一ページ分に「入金高」「出金高」として金額と摘要を一ツ書きで記し、もう一ページ分に当該月の主な出来事を記す。

入出金の記録からは、明治十年代前半における東京在住の士族の暮らし向きの一端を垣間見ることができる。また日記記事からは、川村家とその周辺の動向を知ることができる。とくに、婦元の長男で洋画修業のため留学していた清雄のイタリア在留中そして帰国後の印刷局在職期間における消息は、これまで知られることがなかった情報が盛り込まれている。本稿では、本資料を読解するための助けとなる背景や人物関係を中心に、いくつかの解説を加えていきたい。

\* 東京都江戸東京博物館学芸員

## 一・川村家の家禄奉還と東京還住

まず、本資料の背景を知るために、明治維新から本資料が作成されるまでの川村家の動向を概観し補助説明とする。

江戸城明け渡しから上野戦争を経て、徳川宗家の相続と駿府への移封が決まった後の慶応四年（一八六八）六月、御庭番家筋で徒頭の前職から勤仕並寄合となっていた川村修正は隠居し、当年十七歳の嫡子庄五郎が家督を仰せつけられた。<sup>(2)</sup> 庄五郎は、八月に徳川宗家の幼い新当主龜之助（家達）の奥詰に召し出されて主君とともに駿府へ移り、隠居後帰元と号した修正と家族もまた十月に駿府へ向け出立した。<sup>(3)</sup> ただし、帰元の父閑齋（修就の隠居後の号）と妻龍水（たき）、そして閑齋の長男順次郎は、病氣養生を理由に出立延期を申し立て、結局そのまま東京に残留した。<sup>(4)</sup> 庄五郎は、その後清兵衛そして清雄と名を改め、明治四年徳川家からの給費で家従仲間らと米国留学の途に就いた。

さて、静岡藩七〇万石は、無禄移住者や帰農商に失敗して復籍移住した者を含む一三〇〇人以上もの藩士を抱え、旧禄にに応じて最低限の生活を維持するだけの禄米を支給する禄制を定めた。<sup>(5)</sup> 川村家の元高は三〇〇俵で、現米一〇石八斗が支給された。<sup>(6)</sup>

明治四年廃藩置県が断行され、明治政府はひとまず全国の士族に対する家禄支給を引き継いだが、同時に禄制そのものを廃止する秩禄処分も進められる。明治六年末、政府は家禄奉還に関する太政官布告を発した。家禄奉還に応じた者に対し資本金を与えることによって、士族の就業と自立を促すのが狙いである。川村家は、家禄奉還を申請することを決断した。戸主である清雄は、明治七年六月十九日付でフランスからペン書きの家禄奉還願を送り、<sup>(7)</sup> 帰元は九月六日付で家禄奉還見込書を添えて静岡県に提出した。<sup>(8)</sup> その結果、川村家の家禄一〇石八斗は、規定に基づき一年につき四九円二三銭五厘に換算され、六ヶ年分の合計二九五円四一

銭が、現金一四五四一銭と額面一五〇円の公債証書とに分けて下賜された。

家禄奉還見込書に書かれた帰元の起業計画は、彼が兄順次郎の事業に参加して、家禄奉還で得る資金をもって事業の拡大にあたるというものであった。この頃順次郎は、四谷永住町の地所の払い下げを受けて始めた茶舗が軌道に乗り、子息銃四郎も富士見町に店を開いたという。ちなみに、富士見町の店については、商法講習所の教師としてアメリカから来日したウィリアム・C・ホイットニーの長女で後に勝海舟の子息梶梅太郎と結婚したクララ・ホイットニーが、明治十年に順次郎の実子だった成瀬隆蔵の案内でここを訪れ、その様子を日記に記している。<sup>(9)</sup>

家禄奉還の決断とともに、帰元一家は静岡の家を引き払い東京へ戻った。明治七年六月に静岡を立ち、ひとまず市谷富久町の閑齋宅へ寄留した。<sup>(10)</sup> その後は、四谷筆筒町、四谷仲町、上六番町と四谷麴町辺を転々とし、本資料の記録が始まる明治十一年時点では四番町十三番地の賀川東斎方に同居している。東斎はかねてから川村家の主治医として交際があった人物で、当時陸軍省に出仕していた。その後は、明治十二年四月に四谷区四谷仲町一丁目十四番地、同十五年六月には同町二丁目十四番地に転居している。<sup>(11)</sup> 明治十一年初における世帯の構成は、留学中の清雄を戸主に、帰元・たま夫妻、帰元の三女でう（本資料では「長」と表記）の四人である。末娘のふさ（房子）は、この前年に東京大学教授外山正一に嫁した。

もう一つ、この間における川村清雄の経歴を簡単に述べておく。米国学留中に画学修業を志した清雄は、さらに研鑽を深めるため明治六年パリに渡った。ところが、その年末に政府から海外留學生に対し帰国命令が出されたのを機に、徳川家からの給費が途絶えた。清雄は私費で残留を続けたが、やがてパリでの修業が継続困難になり、明治九年春イタリアのヴェネツィアに移った。当時清雄には三〇〇両ほどの所持金があっ

たというが、それが底をついた頃、宇都宮三郎の周旋で同年十月に大蔵省紙幣寮への御雇が決まり危機を救われた。<sup>13</sup> 清雄の帰国は、明治十四年末のことである。

## 二、入出金記録からみる暮らし向き

さて、これから本資料について、要点ごとに解説を加えていきたい。まず、入出金記録の見方を説明し、当時の川村家の暮らし向きを概観することとする。なお、入出金記録の詳細な分析は、これを利用する人の視点に委ねたい。

入出金記録は、二ヶ月分を一頁に纏め、上段を「入金高」、下段を「出金高」に分けて記している。入金欄には合点がつけられた行があり、借入金金の返済処理を確認したことを示すものと思われる。

まず、入金高の中から定期的な収入としてすぐ目に付くのは、三〇円の「月給」である。これは、清雄が大蔵省から支給されていたもので、清雄が留学中は「留守宅」に渡すものとする<sup>14</sup>と通達されている。他に、明治十一年前半までであるが、「賀川氏より賄受取」としていくばくかの収入を得ている。

それ以外の収入は、親族知人からの借入金か質入れによる入金、そして家財の売却による収入である。負債と返済のバランスは、月によって異なるが負債がやや多い。それでも、親戚知人からの借金は、時間ばかりながらも几帳面に返済を遂げている。本資料は、その債務帳簿と言ってもよい側面を持つ。家禄奉還時に事業拡大を企図していた順次郎の茶舗は、この頃すでに経営が傾いていた。さらに、明治十年の西南戦争後急激に起こったインフレーションが人々の生活を直撃し、多くの士族の家計は一層困難を増していった。

明治十二年頃を境に、入金の内訳は質入れや家財売却の割合が目立つ

ようになり、同十四年に至ってはこれが入金欄のほとんどを占めるようになっていた。帳簿に記される質草や売却品の中には、衣類をはじめ、閑斎が長崎奉行時代に持ち帰ったものと思われる「阿蘭陀皿」や帰元が所用したものであろう布衣、さらには帰元の母龍水あるいはたまの愛用品だったかもしれない琴までもがあり、困窮ぶりが偲ばれる。こうした状況の中で、家族は懸命に生き抜く方途を探りながら、ただ一人の稼ぎ手である清雄の帰朝をひたすら待ち、「安心して三千円の借金までもしてゐられた」<sup>15</sup>のであった。

## 三、日記に登場する親族の動向

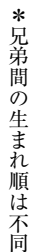
本資料中には、数々の人名が登場する。その一人一人を網羅して事典的な注釈をつけるべきところであるが、紙幅の都合もあり、また川村家の親族のうちこれまで筆者が紹介してこなかった人物についてこの機会に述べておきたいと思うため、この章では以下の人々について若干の解説を行うこととする。別掲【関係系図1】を附す。

### ◎川村富彦・倉地寛裕

ともに川村本家の出身である。富彦は、本家六代助次郎の惣領で前名を富太郎といった。寛裕はその弟で、御庭番の倉地久太郎（近江守）の養子となった。前名は鉄三郎・久太郎。

慶応四年六月、御庭番に対する人員整理が行われ、その際明楽鋭三郎・川村富太郎・倉地鉄三郎・古坂与吉の四人が、奥勤番と改称された職名で改めて徳川家に召し出された。<sup>16</sup> 明治三年頃刊行の『静岡御役人附』には、徳川家達が住まう宮ヶ崎御住居の三等家従として、倉地次郎太郎（倉地分家）・明楽鋭三郎・川村富太郎・倉地久太郎・古坂与吉の名が見える。

倉地寛裕の妻は、清雄の次姉としてである。寛裕は、川村家が上京した後もしばらく静岡に在住し、川村家が家禄奉還を申請した際には静岡で



— 269 — (60)

行地を持ち、表高八二五石を有していた。川村家との縁は、閑斎の五男茂之丞（小十郎と改名）<sup>(27)</sup>が、近藤家第十代八十郎の娘けいと結婚し婚養子となったことによる。小十郎は文久三年（一八六三）に若くして死去、幼い長男国太郎が家督を継いで維新を迎えた。

帰元の日記に記される、新政府の営繕司に宛てた国太郎の願書によると、国太郎は慶応四年二月に勤王証書を提出して気賀及び金指両閑所応接を命じられ、知行地のある遠江国引佐郡花平村へ赴いた。また同じく願書には、川村家の表二番町屋敷について、近藤家が各地に散在する知行地を管理するため家臣の駐在拠点として拝借を願ひ出たことが記され、川村家が東京を離れた後の屋敷の上地を防ぐとしたことが分かる。翌年諸国の閑所が廃止されると、国太郎は東京へ戻り、表二番町の屋敷を下賜された<sup>(29)</sup>。その後は、目黒村に地所を手に入れ、そこを住所としていたらしい。なお、本資料の記事中に時折現われる池田重右衛門は、近藤家の家臣だった人である。

近藤家は、早期帰順者であったため本領安堵を許され、川村家の親族中では最も裕福であった。本資料には、明治十五年十一月に近藤家が鯉喜磨（国太郎の子）の名義で一〇〇〇円の公債証書の償還に当選したことが記される。その後の近藤家は、国太郎も鯉喜磨も明治二十年代初めに死去し、残ったけいが家を守った。後に絶家したものと思われる。

#### ◎塚本辰武・酒巻興敬

塚本家は小普請方改役下役を務めた幕臣で、川村家とは順次郎の長女やすが塚本清左衛門の養女となり婿の辰武と結婚した関係にある<sup>(31)</sup>。辰武は、明治元年民政裁判所に採用され、その後教部省出仕から東京府雇となり同二十二年まで勤めていたことが東京府の資料によって確認される<sup>(32)</sup>が、明治十五年時点では、「山形県奉職二付」、帰元が四谷仲町一丁目十四番地の宅を留守預りという名目で住まっていた。

明治十五年四月、この塚本邸を含む四谷仲町一丁目の土地建物が仮皇

居周辺整備事業にともなう地上げにかかり、転出を余儀なくされた。帰元一家は、五月二十九日に倉地寛裕の家を借りて引越したことが本資料に記される。ちなみに、この地上げ一件については、「四谷仲町民有地買上回議録」<sup>(33)</sup>に詳細な記録があり、東京の都市史研究史料として知られている<sup>(34)</sup>。

酒巻興敬は、越後国北蒲原郡竹前左平次の七男で、前名を夢藏という。十四歳の時、新潟奉行として赴任していた川村閑斎に童小姓として召された。彼が晩年に書いた回顧録「思ひ出草」によると、興敬は閑斎が新潟離任のさい主人に従って江戸へ出府、その後も近侍役として閑斎の赴任先に随行した。閑斎が長崎奉行の任を終えて帰府した後の安政五年（一八五八）に、主家のはからいで、塚本家と養子縁組の上、作事方手代の酒巻幸之進の婚養子となり、晴れて幕臣となった。維新後は、塚本の誘いで民政裁判所に出仕し、土木寮や陸軍省で営繕事業に従事した。彼は川村家から受けた恩義を生涯忘れず、閑斎の祥月命日には必ず墓参し和歌を捧げた。ちなみに、宮内書記官で『華族制度の研究』の著者として知られる酒巻芳男は、興敬の長女を母としその関係で酒巻家の養子となった人である。

他に本資料には、沼津で活動する江原素六と和多田一夢の動向も散見される。和多田一夢の経歴については、以前拙稿で紹介したことがある<sup>(35)</sup>のでここでは触れない。この当時の江原は、士族授産のための開墾牧畜事業や製茶輸出業「積信社」の設立など、さまざまな事業を展開していた。川村家はその事業に関与していたかどうかは不明だが、帰元と沼津の兩人とはしばしば書簡の往復や物資の送付を行っている。本資料の明治十四年七月十九日に一夢に宛てて「水シャボン」を送ったと書かれる件については、「川村家資料」中に江原から帰元に宛てた書簡がこれに対応する。

#### 四、鬼籍に入る古老たち

明治維新から十年を過ぎ、帰元の日記には幕末の激動期に活躍した古老たちの死去に関する記事も表れる。

まず、川村家にとって最も大きな出来事だったのは、一家の支柱川村閑斎の死であった。晩年の閑斎は、番衆町の別屋敷に近い市谷富久町に住んでいたが、明治十年に四谷仲町三丁目十五番地に転居した。<sup>(37)</sup>そして翌年の四月八日、ここで八十四歳の生涯を終えた。その臨終は、賀川東斎が看取っている。<sup>(38)</sup>閑斎の訃報は、四月二十一日に帰元が発した手紙で清雄に伝えられた。八月二十三日夕、六月二十二日付の清雄の手紙が家族と酒巻興敬に宛てて届いたことが日記に見えるが、その内容は祖父の死を悼む文面であったと想像される。ちなみに、閑斎が臨終を迎えた仲町の家は、彼の死後間もなく志村貞廉が静岡から上京したさいに入居している。<sup>(39)</sup>

さらに日記には、閑斎の死から五ヶ月後の九月四日に甲良匠の訃報が、明治十三年三月十五日に村垣淡叟の死去の旨が記される。

甲良匠は、江戸城の造営を指揮したことで名高い幕府作事方大棟梁甲良家の第十代棟全（筑前）のことである。川村閑斎の三番目の姉まちが第九代棟全（吉太郎）と結婚し、その間に生まれたのが棟全である。川村・甲良両家は親密に交際し、閑斎や帰元の日記には甲良の名が頻繁に登場する。閑斎自身も、細工物を得意として日用の品をよく手作りした。こうした関係からか、川村家の周辺には作事方の人脈が見え隠れする。酒巻興敬が幕臣になる際養子先選ばれたのも作事方の家であった。

閑斎は、維新の混乱期に、甲良屋敷がある千住に別宅を設けて書物など家財の一部を避難させ、自身もしばらくここに住んだ。<sup>(40)</sup>清雄も、新政府軍による江戸城総攻撃が予定された慶応四年三月十五日に母や妹らとともに甲良の屋敷地がある市谷へ一時避難したことが、帰元の日記に記

されている。<sup>(41)</sup>また、甲良匠の孫初之助は清雄のもとで絵画を習っていたらしく、清雄が開いた画塾の初期の門弟たちが清雄や帰元らを酒宴に招いた招待状に、塚原律子や東城鉦太郎などと並んで甲良初之助の名が見える。<sup>(42)</sup>

余談だが、明治三十二年に開かれた川村清雄の個展について展評を書いた国民新聞の記者は「氏をして画家たらしめんよりは寧ろ建築家とな」したいと述べたが、<sup>(43)</sup>清雄の生み出す作品が、神代杉や漆板など元来建具に用いられる材料を活用し、住空間との調和を意識した装飾性を特徴的に表すのは、彼の成育環境の中に甲良家の存在があったことを考慮に入れるべきであることを指摘しておきたい。

村垣淡叟は、万延遣米使節の副使として有名な村垣範正である。村垣家は御庭番家筋の一つで、閑斎の長姉たいが範正の父範行に嫁いだ。彼女は結婚後わずか二年で早世し、範行が後妻を娶って生まれた次男が範正である。範正に対して閑斎はよく目をかけて指導にあたり、二人はともに幕末の困難な政治にあたった。

古老の死について、もう一人の人物に言及しておきたい。日記中に、明治十二年五月二十五日「星野老婆」が小金井で亡くなったという記事がある。帰元はその前に星野家を見舞い、訃報を聞くと小金井までわざわざ弔問に出掛けた。星野家からは、形見の品が贈られた。このことから、彼女はかつて川村家に仕えた女性であったと想像される。小金井市内にある星野家墓所には、下小金井新田の名主を務めていた星野宇右衛門夫妻の墓石があり、宇右衛門の妻と思われる「祥山良雲信女」の命日が明治十二年五月二十五日と刻まれている。この人が「星野老婆」であることは間違いないであろう。

なお、川村家に仕えていた女性についてもう一人言及しておくと、本資料には「りか」と記される女性の名が見える。彼女は野沢りかといい、新潟の野沢半十郎の二女という。<sup>(44)</sup>閑斎が新潟奉行在任中に雇われ、その

まま明治に至るまで川村家に仕えていた。川村閑斎の没後、恩顧を受けた人々が墓前に備えた灯籠（新潟市歴史博物館所蔵）には、「野沢利賀」の名が刻まれている。本資料の明治十四年十一月の記事には、りかが来春帰国と書かれているが、実際には明治二十一年に帰郷した<sup>(45)</sup>。こうして、川村家の周辺からは、旧幕時代から近い人々が櫛の歯が欠けるように辞去していった。

## 五、北の大地を目指して

本資料には、かつて蝦夷地とよばれた北海道函館（明治二年箱館から改称）へ移住あるいは出張する親戚知人の消息が記される。函館は幕末の開国で開かれた五港の一つで、戊辰戦争最後の戦場ともなった。土族の北海道への入植は早期から政策的に行われていたが、秩禄処分を契機に、そこで得た資金を元手に新天地で身を起こそうとする土族の移住が盛んになった。

川村家の周辺でも、函館へ移住する者が現れた。帰元の長女きんとその家族である。きんは、慶応四年に前夫と死別した後、明治四年に静岡で旧幕臣の渡辺章三（安五郎）と再婚し翌年上京した<sup>(46)</sup>。明治十一年八月、章三に対し金禄公債証書が発行され、帰元は章三の委任状を持って東京府へ出頭し、計六〇〇円分の証書を受け取った。この頃から章三は、一家を挙げた函館への移住計画を進める。明治十二年五月に渡辺家は帰元宅へ同居し、同年末には四谷区内の家作を西郷篤信なる者に売却した。この家作は、その後志村貞廉が借り受けている<sup>(47)</sup>。章三は東京と函館を行き来して家族の受け入れを整え、明治十四年八月に一家は函館へ移った。移住後の章三は、明治二十年まで北海道庁の技手として働いていたことが確認できる<sup>(48)</sup>。

また、本資料中でいささか興味を引くのは、明治十四年八月九日に中

野誘が中野梧一に連れられて函館へ向け出立したという記事である。中野梧一は、旧名を斎藤辰吉といい、父が中野家からの養子であった<sup>(49)</sup>。旧幕時代には勘定組頭を務め、戊辰戦争では抗戦派となって蝦夷地へ走り箱館五稜郭に参戦した。敗戦降伏で投獄され、出獄後は父の実家である中野家の籍に入って中野梧一と名乗った。その後は新政府に出仕して初代山口県令を務め、後実業界に身を投じた。高橋由一の代表作『花魁』のモデルと言われる吉原の遊女小稲と馴染であったというエピソードでも知られる。誘と梧一が函館へ赴いた明治十四年八月は、政府による開拓使官有物払下げ事業が一大政治疑獄事件に発展するまさにその渦中にあり、梧一は事件の当事者である関西貿易商会の経営者の一人であった。本資料の記事は、当時の梧一の動向を知る上で貴重な情報でもある。

他には、明治十三年一月に松岡譲が三井物産会社に雇われ函館へ出立するという記事が見える。松岡譲は前名を松岡四郎次郎といい、奥右筆所詰から撒兵頭並となり、箱館戦争を戦った。敗戦後は開拓使に出仕し、明治十三年に三井物産が函館に支店を開設した際、初代函館支店長となつて赴任し経営に重きをなした。松岡と川村家との関係は未詳だが、本資料では松岡が近藤家と金銭の貸借をしていることがうかがえる記事が見られる。

また、本資料には登場しないが、帰元の甥、宮重文信（一之助）も明治十年代から函館に在住していた。文信は、閑斎の妻龍水の弟宮重丹下（吏休）の長男で、維新前には騎兵頭並の職にあり、戊辰戦争では榎本武揚とともに箱館で戦い降伏人となった<sup>(50)</sup>。赦免の後陸軍省に出仕し、明治九年まで官員録にその名を見ることができ、その後函館へ移住し起業したもようである。明治十八年十月きんが函館で病没し帰元が駆けつけた際の日記には、宮重文信と松岡譲らの歓迎を受けたことが記されていることから、この時すでに文信は函館に生活の拠点を置いていたことが分かる。当時文信は、郵船の貨客取次所を経営していたらしい<sup>(51)</sup>。

## 六、海外との通信

さて、ここで視点を変えて、当時ヴェネツィア留学中の長男清雄と家族との通信の様子について見ていきたい。本資料からは、明治十一年から十四年の間に清雄と家族間の通信がどれだけ行われたかを知ることができる。

清雄から家族に宛てて書簡が届けられた回数は一回、家族から清雄に宛てた通信は品物の仕送りを含めて通算二三回に及ぶ。清雄が留学先から家族に宛てて書いた書簡のうち、現存が確認できるのはほとんどがアメリカ時代のものであり、本資料の記事は彼の滞欧期の空白を埋める情報となる。<sup>(53)</sup> なお最近、新潟市歴史博物館所蔵資料中に帰元がイタリアの清雄に送った書簡が発見された。<sup>(54)</sup> これによると、清雄は家族とその周辺の近況を逐次知らされており、日本の情報から隔絶していたのではないことが分かる。

また、通信を取り持つ人々の存在も注目される。日本では明治十年に万国郵便連合への加盟を遂げ国際郵便制度が整いつつあったが、当時まだ過渡期にあり、外国への郵便物は海外渡航の知人やその関係機関に託す方法が最も確実であった。川村家も、周辺の人脈を活用して、遠い西欧にいる清雄と連絡を取っていた。

日記に見える取次人としてまず挙げられるのは、兼松直稠と吉田要作である。兼松直稠は、清雄がパリ留学中に日本公使館二等書記官を務めていた人物で、清雄の志を宇都宮三郎に話して清雄が紙幣寮に雇用されるまでのきっかけを作り、清雄がパリからヴェネツィアに移る際の受け入れ先として友人の吉田を紹介した恩人の一人であった。兼松は、一旦帰国の後、明治十一年にバリ万博御用掛として再びパリへ出張しており、日記に「金松」と表記される人名は、兼松を指すものと思われる。また吉田要作は、明治九年末の帰国までヴェネツィア商業高等学校日本語教

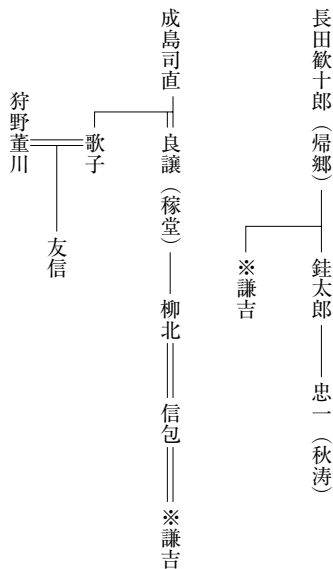
師の職にあり、宿所を共にするなど留学の蓄えが尽きようとする清雄を助けた。

次に、清雄との通信を取り次ぐ存在として頻繁に表れるのは「長田」の名である。これは、当時外交官として活躍していた長田鈺太郎とその家族をさす。川村家と長田家との関係は、後の清雄と劇作家長田秋涛との交友関係にも直接つながっていくため、この機会を借りて少し詳しく紹介しておきたい。参考に【関係系図2】を附す。

長田家は駿府勤番の家で、鈺太郎の父歙十郎（帰郷）は安政二年に家族を率いて江戸へ出府した。江戸では、二人の子息とともに開成所物産方に入門している。<sup>(55)</sup> 歙十郎の二人の子息のうち兄の鈺太郎は、フランス語を学んで直ちに頭角を現し、最後の開成所頭取となった。維新後は、静岡学問所教授を務めた後、明治新政府に出仕、明治五年から七年にかけてパリの日本公使館に勤務した。その後も駐露日本公使館勤務を経て、宮内省や内務省において活躍した。

弟の謙吉もフランス語を学び、兄鈺太郎との縁で、もと幕府奥儒者で外国奉行や会計副総裁を務めた成島柳北の養子となった。柳北には信包という養子がいたが、信包が明治元年に静岡移住後間もなく早世した

【関係系図2】長田・成島家関係系図





め、改めて謙吉を養子に迎えたのであった。<sup>(56)</sup>その後、陸軍への出仕を経て内務省の官僚に転じ、主に農商務畑で様々な博覧会や共進会の事務を担った。明治十一年のバリ万博では、審査官通弁として渡仏している。<sup>(57)</sup>

長田家と川村家がもともとどのような関係にあったのか不明だが、一つ確かな繋がりを見出すことができる。それは、宮重文信との縁故である。文信は、旧幕陸軍で成島柳北が騎兵頭の任にあった時、騎兵差図役頭取として柳北を補佐した。維新後謙吉に陸軍への出仕を勧めたのは文信であり、謙吉が最初の結婚をした際には文信が仲人を務めた。<sup>(58)</sup>

清雄との関わりでも、彼の仏留学の時期と銈太郎のバリ日本公使館駐在期間や謙吉の仏留学の時期が一部重なる。彼らがパリで親交を結んだ関係が、そのまま続いていたことは言うまでもない。

なおついでに言えば、川村修富と修就の実名を考えたのは成島柳北の曾祖父成島仙蔵であり、順次郎と帰元に修和・修正の実名を与えたのは、その子成島司直であった。<sup>(59)</sup>

本資料が書かれた当時、長田邸は麹町区下二番町二十三番地にあった。<sup>(60)</sup>この時期銈太郎は、サンクトペテルブルグの日本公使館へ赴任中で日本にいない。<sup>(61)</sup>しかし、父の帰郷はまだ存生中であり、留守家族が川村家から書簡を預かり外務省ルートを通じて発送の便宜を計ったのであるう。

さらに成島家に関連して言うと、日記中には、明治十三年四月に画家狩野友信が在伊の百武兼行を通じて清雄へ届け物をしている記事が見える。狩野友信については、母が成島司直の娘であることが山田久美子氏によって明らかにされている。<sup>(62)</sup>このことから、清雄と友信とは成島家を通じて以前から知己の関係にあったことが想像される。

以上長田家についてのコメントで紙幅を割いてしまったが、この他、明治十二年にイタリアから帰国した領事中島才吉や翌十三年に帰国したローマの日本公使館一等書記生の三輪甫一といった、イタリアから帰国

した面々が清雄の書簡をもたらしたことが日記に記される。また、明治十三年に欧州へ赴任する大久保学而やフランス留学へ出発する天野富太郎に、帰元は清雄への届け物を託した。海外渡航者は、こうして外国に滞在する日本人と日本の家族との通信を取り持つ役割も果たしたのである。

## 七、印刷局関係

最後に、本資料における大蔵省印刷局関係の記事を眺めたい。

明治九年十月に紙幣寮御雇となった清雄は、翌年ヴェネツィア美術学校で首席の成績を収め、紙幣頭得能良介を満足させた。得能は、御雇外国人として招聘したイタリア人キヨッソーネを通し駐日イタリア公使に清雄が現地で優遇されるよう頼み、さらに自身も公使館へ出向いて念押ししようとするほどの入れ込みようであった。<sup>(63)</sup>本資料には、明治十一年九月に帰元が二度紙幣局（明治十年一月紙幣寮から改称。さらに同十一年十二月に印刷局と改称）から呼び出された記事が見られる。帰元は清雄の履歴書の提出を求められ、十二日に得能局長と面会した。二十二日にも再び局に呼ばれて清雄が描いた油彩画二枚と水彩画一枚を見せられた。得能局長の意向は、油彩画が良くできているので今後は「過日談之廉ト違専ら油画修行致し候様致し度」というものであった。

この時イタリアから送られてきた油彩画は、得能をして「過日談之廉」を変更させるほど格別に優れていたようである。この一件については、最近石井元章氏がこれに関連すると思われる資料を紹介されている。石井氏は、ヴェネツィア美術学校の口述台帳から、清雄に「名譽言及プラス秀」の榮譽を与えたことを証明する一八七八年八月五日付の書類を発見し、受賞作品が日本に送られたのではないかと考察された。<sup>(64)</sup>当時イタリアー日本間の郵便にかかる日数がおよそ二ヶ月弱だったことと、証明

書の日付と紙幣局に届いた時期を照合すると、概ね符合する。祖父閑斎の訃報に接した清雄が渾身の力を込めて描いたのであるう作品が、最高の榮譽を得たのである<sup>(65)</sup>。

明治十四年十一月八日、印刷局から川村家へ報せが届いた。「川村家資料」には同日付の帰元宛得能良介書簡が残されている<sup>(66)</sup>。十二月十四日に横浜港へ着船した清雄は、まずは富士見町の順次郎の家に逗留してから四谷仲町の家に入り、翌年二月に四谷南伊賀町一番地へ転居した<sup>(67)</sup>。これが、得能が清雄に与えたという住居であろうか。本資料には、清雄が四月に借家を買取契約をし手付金を支払ったとある。また、明治十五年に入ってからの入出金記録には、清雄の手で川村家の負債が次々と処理されていくさまを見ることが出来る。

さて、清雄は明治十五年の新年を迎えると直ちに印刷局での勤務を始めたが、得能局長の熱い期待にもかかわらず、奉職はわずか一年弱で終わった。その原因の一つにキヨッソーネとの確執があったことはよく知られているが、それをうかがわせるかもしれない記事が本資料中に見える。

三月三十日に清雄は日給五〇銭を増加されたが、翌月十四日には清雄が病気で仕事を休んでいること、それでも「平素篤志勉勵」につき日給を与えられることになったことが記される。そしてその翌日、清雄は得能局長に連れられ熱海へ出掛けた。その後の清雄は、時折帰京しながらも少なくとも七月二日の帰宅まで熱海に滞在していることが分かる。これらの記事の内容から、清雄の欠勤は一時的なものではなく、ある程度長期に及んでいることが推測される。

清雄の病気の実態は不明だが、一つにはキヨッソーネとの人間関係が原因にあった可能性が考えられる。例えば一月四日付で清雄が受けた辞令には、「キヨッソーネ之主義ニ因テ」という異例の但し書きがつけられていた<sup>(68)</sup>。この文言は、キヨッソーネが清雄に対し着任前からすでに警戒

心を抱いていたことを物語る。イタリアで次々と優秀な成績を収め西洋人顔負けの作品を局に送ってくる天才留学生に対して、キヨッソーネが危機感を覚えたのは無理もないであろう。こうした状況下で、イタリア語で直接会話ができる両者が衝突するまでに、長い時間はかからなかったはずである。

清雄の熱海滞在は、一義的には印刷局刊行の魚類図譜『なみまの錦』に係る調査にあったと考えられるが<sup>(69)</sup>、その裏には清雄とキヨッソーネとの間に冷却期間を置くための得能局長の配慮があったのではないだろうか。もしそうだとすると、明治十五年春には早くも両者の関係は抜き差しならぬ事態に至っていたということになる。この頃、勝海舟が得能に宛てて清雄を世話してくれていたことへの礼状を書いたのは、こうした事情を踏まえた上でのことだったのかもしれない。ちなみに、この頃既に重病をかかえていた得能は、寒中を熱海温泉で過ごすようになっていた<sup>(70)</sup>。

キヨッソーネの圧力から離れた熱海で、清雄は絵を描いていた。印刷局に残された清雄の作品のうち、熱海の景色を描いた作品が数点あることを、印刷局に勤務していたことのある石井柏亭が証言している<sup>(71)</sup>。清雄が得意とする画題の一つに、巖に打ちよせる波濤や浜辺の風景、そして身近な魚介をモチーフにした静物画がある。ダイナミックに躍動する波から静かに透き通る川面に至るまで、清雄が描く巧みな水の表現は、この熱海滞在中に伊豆半島の海岸や山野を実踏しながら研究されたのかも知れない。

印刷局での清雄をめぐる一連の騒動と清雄の辞職について、本資料は何も語らない。しかし、日記の最後の月となる明治十五年十二月八日に、みつという女性を引き取ったという簡単な記事が記される。彼女こそ、清雄が印刷局退職と引き替えに結婚した女工である。川村家資料「東京寄留書面類扣」には、明治十七年一月二十六日付で本籍地の静岡へ向け

て提出された、清雄と湯島に住む武藤茂助の長女みつとの縁組届の写し  
が書き留められている。

清雄が印刷局を去った一年後の明治十六年十二月二十七日、得能良介  
は息を引き取った。彼の名による『なみまの錦』の序文は、同年十二月  
の日付である。

## おわりに

以上、雑駁ながら資料解説を行った。日記の記述だけでは前後の事実  
関係や人物関係が不明瞭な部分もあり、なお十分な理解を要するが、そ  
れは今後の課題としたい。とくに出入金記録については、ここではあえ  
て簡単な解説に留めたが、統計分析の素材としても有用と思われるので、  
関心のある向きには活用されたい。

近世的な武士身分が解体し、日本の社会構造がドラスティックに再編  
される過程で、自己変革を迫られた士族層が、新たな時代に順応すべく、  
長年培った人的ネットワークを頼りに、互いに助け合いながら生き抜い  
うとする姿を、川村家の家計日記は見せてくれる。またこれとは対照的  
に、画家としての「個」を貫き通すことを選んだ川村清雄が、生涯歩み  
続ける孤独で険しい道の、その始まりを垣間見ることができる。本資料  
が、明治期の士族の生活に関する諸研究の素材となり、また当該期の海  
外留学史や美術史研究の一助になれば幸いである。

なお、本資料を利用するにあたって、合わせて読んでいただきたい資  
料がある。それは、本文でも何度か注記した志村貞廉の日記である。志  
村貞廉はもと八王子千人隊之頭で、彼の妻は婦元の妻たまの妹荒井きん  
であった。貞廉は、明治元年から十四年に至るまで日記を残している。  
現在東京大学史料編纂所に所蔵されるこの資料は、宮地正人氏の紹介で  
学界に知られるようになり、最近八王子市郷土資料館によって完全翻刻

が実現した。川村家の家計日記は、志村日記のうち最後の四年間が重なる。  
両資料が関連する記事については、筆者が本稿でその一部に触れた  
が、両者を比較することとさらに内容の理解を深めることができるので、  
志村日記もぜひ合わせて活用されたい。

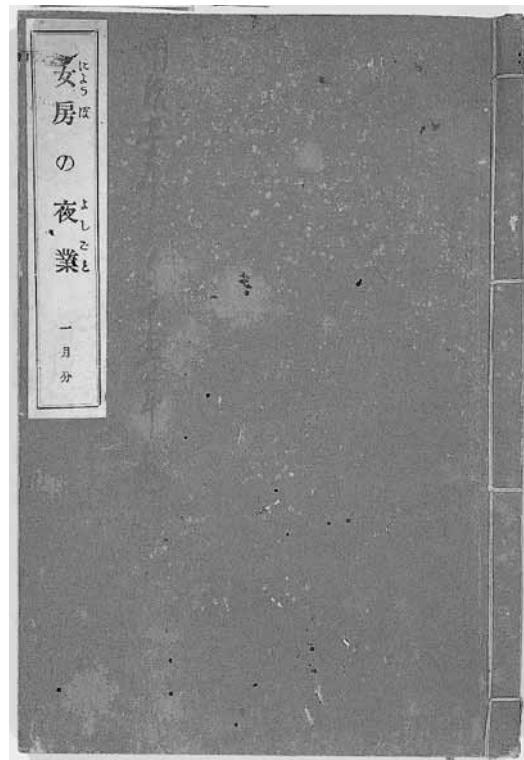
(附記) 本稿の執筆にかかる調査にあたっては、中野誘の令孫であられる中野実氏  
並びに中野四郎氏、中野楽遊の墓所である長遠山常楽寺、そして、小金井  
市文化財センター学芸員多田哲氏・小金井市史編さん委員会畑野時夫氏、  
橋爪映子氏(成島柳北六女むめの令息故大島隆一氏の義姪)から多大なる  
ご指導ご協力をたまわった。末筆ながら心より感謝申し上げる。

## 【註】

- (1) 川村修富及び修就の日記については、小松重男『幕末遠国奉行の日記 御庭  
番川村修就の生涯』(一九八九年 中公新書)、同『旗本の経済学 御庭番川  
村修富の手留帳』(一九九一年 新潮社)によって、大まかな記事内容を把握  
することができる。また修就の新潟奉行時代の日記は、新潟市郷土資料館年  
報第二集『初代新潟奉行川村修就文書Ⅰ』(一九七八年)・同第七集『初代新  
潟奉行川村修就文書Ⅱ』(一九八三年)に翻刻が収載されている。
- (2) 川村庄五郎明細短冊(川村家資料 資料番号03002069)。
- (3) 慶応戊辰日新記 明治元年十月二十七日条(新潟市歴史博物館所蔵初代新潟  
奉行川村清兵衛文書(以下「新潟川村文書」とする) 史料番号506 国立国会  
図書館マイクロフィルム「川村家文書」にも所収)。
- (4) 川村婦元日記 明治元年十月三日条(川村家資料 資料番号03001989)
- (5) 『静岡県史』通史編五 近現代一 一二頁・二八頁(一九九六年 静岡県)
- (6) 家禄奉還未済分下賜願関連書類綴(川村家資料 資料番号03000903)
- (7) 家禄奉還願(川村家資料 資料番号03000904)
- (8) (6)に同じ
- (9) 一又民子他訳『勝海舟の嫁 クララの明治日記』下 明治十年十一月十九日  
条(一九九六年 中公文庫)
- (10) 志村貞廉日記 明治七年六月二十六日条(八王子市郷土資料館編『元八王子

- 千人頭 志村貞廉日記』二（二〇一二年 八王子市教育委員会）。以下、志村日記の記事は同書による。
- (11) 東京寄留書面類扣（川村家資料 資料番号03000898）
- (12) (11) に同じ
- (13) 川村清雄「洋画上の閨歴」（後藤宙外他編『唾玉集』所収 明治三十九年 平凡社東洋文庫版）
- (14) 川村清雄宛得能良介書簡写 明治九年十二月四日付（川村家資料 資料番号01002030 高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』（一九九四年 中央公論美術出版）に翻刻掲載）
- (15) 木村駿吉『川村清雄 作品と其人物』第九章 両親の失望（一九二六年 私家版）
- (16) (4) に同じ 慶応四年六月二十一日条
- (17) 川村帰元宛倉地寛裕書簡 年欠（明治七年）九月二十日付（川村家資料 資料番号03001002）他
- (18) 前田匡一郎編著『慶喜邸を訪れた人々―「徳川慶喜家扶日記」より―』四五頁（二〇〇三年 羽衣出版）
- (19) 『東京府青山師範学校一覽』（明治四十二年 国立国会図書館所蔵）
- (20) 「進退原義」冊ノ十一 明治二十三年（東京都公文書館所蔵 請求番号601. B217）他
- (21) 前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣団』第四編（二〇〇〇年 私家版）の「屋敷地所有者（旧幕臣）一覽」に、西草深町にあった富彦の所有地が明治七年人見寧に譲渡されたことが記されている。なお、川村富太郎について、註(18) 前田氏前掲書では、徳川宗家家扶を務めた川村一と同一人としているが、情報が混同されていると思われる。
- (22) 中野四郎氏所蔵
- (23) 志村日記 明治五年十一月二十一日条他
- (24) 志村日記 明治五年五月十二日条
- (25) 『日本全国諸会社役員録』（復刻版）第九卷二三三頁（一九八九年 柏書房）。なお、松本常磐については、拙稿「拙稿「明治後期における川村清雄の作品売買の一樣相―川村家の親族と三井系人脈の關係にみるパトロネージの実態―」（『東京都江戸東京博物館紀要』第一号 二〇一一年）を参照されたい。
- (26) 若林淳之『旗本領の研究』一一頁（一九八七年 吉川弘文館）
- (27) 古過去帳断片（川村家資料 資料番号03002060）
- (28) (4) に同じ 明治元年十月十一日条
- (29) 日新録 明治三年七月二十五日条（新潟川村文書 史料番号547 国立国会図書館マイクロフィルムにも所収）
- (30) 東京都公文書館所蔵「太政官御布告留」慶応四年八月 請求番号605A301）
- (31) 酒巻興敬「思ひ出草」（川村家資料 資料番号11002485）。清書本は新潟市歴史博物館に所蔵。
- (32) 「官省御用留坤全」（東京都公文書館所蔵 請求番号605D202）及び「恩賜原義 冊ノ五」（同 請求番号601B322）
- (33) 東京都公文書館所蔵 請求番号612C225
- (34) 松山恵「明治初頭における東京の居住―近世近代移行期における江戸、東京の都市空間（その2）―」（『日本建築学会計画系論文集』第五六二号 二〇〇二年）
- (35) 拙稿「ある静岡育英会奨学生の記録―医師高梨鎮の生涯と旧幕臣和多田家の明治「川村清雄関係資料」から―」（『東京都江戸東京博物館紀要』第四号 二〇一四年）
- (36) 川村帰元宛江原素六書簡 明治十四年七月二十一日付（川村家資料 資料番号03001205）
- (37) 富久町ヨリ仲町江御移転ニ付諸事記録（川村家資料 資料番号03000899）
- (38) (11) に同じ
- (39) 志村日記 明治十一年四月三十日条
- (40) 「千住書物目録」慶応四年六月（新潟川村文書 史料番号886 国立国会図書館マイクロフィルムにも所収）
- (41) (4) に同じ 慶応四年三月十五日条
- (42) 川村清雄他宛書簡 年欠四月一日付（川村家資料 資料番号03001255）
- (43) 桂陵生「河村清雄氏絵画展覧会」（六）（国民新聞 明治三十二年三月五日）
- (44) 川村帰元宛野沢仁源次書簡 年欠（明治二十一年か）八月六日付（川村家資料 資料番号03001067）
- (45) 野沢りか新潟へ帰郷につき送物及び下金等綴 明治二十一年七月（川村家資料 資料番号1300303）
- (46) 志村日記 明治四年十二月九日・十日条、同五年四月十三日条
- (47) 志村日記 明治十三年一月十五日条
- (48) 川村帰元宛渡辺章三書簡 明治十九年四月十九日付（川村家資料 資料番号

- 04001426) 同書簡 明治二十年三月七日付 (同 資料番号04001429)
- (49) 田村貞雄校注『初代山口県令中野梧一日記』(一九九五年 マツノ書店)。なお、中野梧一と中野誘との系図上の関係については、樋口雄彦「江原素六とその周辺五一 中野梧一と江原素六」(明治史料館通信二五―三 二〇〇九年十月沼津市明治史料館)が田村氏の解説に修正を加えている。
- (50) 樋口雄彦「羽山蛭関係資料目録 解説」(沼津市明治資料館編『沼津兵学校出身者資料目録』二〇〇七年)
- (51) 箱館行日記 (川村家資料 資料番号03002052)
- (52) 『函館市史』通説編第二巻 九一頁(一九九〇年 函館市)
- (53) ちなみに、「川村家資料」には、徳川家達の没後『徳川家達公伝記』の編纂が企画され、その際清雄の日記と「川村清雄氏より厳父宛書翰」七七通が、伝記編纂所によって川村家から借り出された事実が確認される(川村清衛宛井野辺茂雄書簡 昭和十六年一月十四日付(川村家資料 資料番号04002097)、尾形正弥宛北島正元書簡及び借用証 昭和十七年七月四日付(同 資料番号04002101))。
- (54) 川村清雄宛川村帰元書状 年欠(明治十年)八月十九日付(新潟川村文書史料番号7139)。新潟市美術館『川村清雄展』図録(二〇一五年)一四―一五頁に図版と釈文を掲載。
- (55) 樋口雄彦「資料紹介 幕臣博物学者鶴田清次とその資料」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一八三集 二〇一四年)
- (56) 大島隆一『柳北談叢』三五頁(一九四三年 昭和刊行会)
- (57) 成島謙吉の経歴については、松本和男『石上露子研究』第二輯(一九九七年私家版)に、自身の詳細な履歴を記した「聖田履歴」が翻刻されている。
- (58) (57)に同じ
- (59) 万融院様御手留 寛政十一年十二月一日条、天保五年十一月二十六日条(新潟川村文書 史料番号388 国立国会図書館マイクロフィルムにも所収)。
- (60) (57)に同じ。二四五頁
- (61) 人名事典や銈太郎に関する著述の中には、銈太郎のロシア駐在が明治九年から十一年と記すものが少なくないが、当時の官員録を見ても彼のロシア駐在は明治十一年から十五年の間であることは確かで、これらの記述は誤りである。
- (62) 山田久美子「狩野友信の明治―奥絵師から日本画教師へ」(『近代画説』第九号 二〇〇〇年)
- (63) 伊国留学川村清雄ニ与フル書翰案(早稲田大学図書館所蔵大隈文書)。本文書は、清雄へ宛てた得能書簡の写しである。年月日を欠いているが、十一月十七日及び二十七日に天皇と皇太后・皇后が相次いで紙幣局工場の視察に訪れたことに言及していることから、行幸啓のあった翌月の明治十年十二月と推定できる。
- (64) 石井元章「明治美術会のやうなもの」川村清雄関係新資料紹介(『近代画説』第二三三号 二〇一四年)
- (65) この作品について、石井氏は前掲論文において、筆者が展覧会図録で執筆した作品解説(江戸東京博物館・静岡県立美術館『維新の洋画家 川村清雄展図録』)をもとに、清雄の初期代表作『画室』の可能性があると説及された。『画室』は、木村駿吉が『川村清雄 作品と其人物』の中で、清雄が美術学校で一等賞を取った作品(第七章「日本画と洋画の修業」及び第三章「力作」と言っており、筆者はこれを念頭に解説を行った。しかし、一八七七年に清雄が一等を受賞した時の賞状(川村家資料 資料番号01001778)に「こいつ、石井氏のご協力を得て翻訳した文面は「水彩による衣文表現」(同図録二二四頁)とあり、油彩画である『画室』が果たしてこれに該当するかの疑問が執筆当時から生じていた。このたび石井氏による新資料の発見によって、その疑問が解けたように思える。なお、当時の筆者の解説では、この作品を得能良介の長女清子が西郷従道と結婚した折に持参したものと言った。しかし清子の結婚は明治三年のことで誤りである。ここに修正させていただきたい。
- (66) 川村家資料 資料番号01002037
- (67) (11)に同じ
- (68) 大蔵省印刷局編『大蔵省印刷局百年史』第一巻 六四五頁(一九七一年 印刷局朝陽会)
- (69) 川村清雄印刷局辞令 明治十五年一月四日付(お札と切手の博物館所蔵)
- (70) (13)に同じ
- (71) 得能良介宛勝海舟書簡 年欠(明治十五年)三月二十一日付(国立国会図書館憲政資料室所蔵「得能良介関係文書」No.65)
- (72) 『得能良介君伝』五六六―五六七頁(大正十一年 朝陽会)
- (73) 石井柏亭「川村さんと私」(『中央美術』第五卷第一号 大正八年)
- (74) 宮地正人『幕末維新期の社会的政治史研究』(一九九九年 岩波書店)



家計日記 表紙

[illegible]

【資料釈文】

(凡例) 1. 助詞の「江」は「え」と表記し、合字の「より」は開いて表記した。

2. ★は合点がついた項目であることを表す。

〈表紙〉

(朱書) 「明治十一年より十五年迄」

(題箋) 「女房の夜業にようば よしごと 一月分」

明治十一年 一月二月中

(入金高)

★十五円 池田ヨリ借用、四月マテ

一月十三日 ★五円 中野ヨリ

十八日 三拾円 月給受取

廿一日 一、七円 賀川氏より賄受取

★一、十五円 池田より四月迄

二月四日 一、二円 賀川ヨリ賄

同 ★一円 中野より

五日 ★二円 同

二日前 ★一円 同 持参

八日 ★一円三銭 イセヤ二品預

九日 ★一、二円 中野持□

十三日 ★二円 誘持参

二月十八日 ★一、拾円 渡辺ヨリ借用

十九日 一、三十円 月給渡ル

廿八日 七円 加川氏ヨリ月賄受取

(出金高)

一月十六日 五拾銭 りカ借用之内掛金ニ而済、残一円

十九日 五円 十三日借用中野え戻ス

同日 三円 渡辺ヨリ十一月借用十五ノ内返ス、残り二円

同日 三円 倉地ヨリ十二月借用十円之内

三十日 壹円 渡辺え返ス十五円ノ内一円残

二月四日 五拾銭 渡辺え返ス

六日 五拾銭 同断 ○昨年十一月廿八日渡辺より十五円済切

十六日 五十銭 りかえ借用ノ内掛金ニ而済、残り二分

十九日 二円 倉地ヨリ十二月借用之内返ス

廿二日 六円 中野え戻ス

廿六日 二円 中野え戻ス、皆済

(来客)

一月五日 吉田□マルチン同道参ル、留守ニ而面会不致、昨日成島

来ル

九日 金松来ル

(他行)

一月六日 吉田え昨日之挨拶ニ参る

十一日 勝小鹿え参り面会致ス、滝村同断

十三日 四谷より安藤え参る

十二日 下谷え参る

十四日 相撲

十五日 牛込

十六日 無尽

二月七日 銃太郎問寒え参る(カ)

(進物)

一月六日 昨日酒巻ヨリ到来鴨金松え遣ス

（事故雑記）

一月八日 ○松島え賀川氏ヨリ受取二円、三番丁宿や毛利やえ持参相渡ス

十二日 同人札状連名ニ而差越ス

○十六日 お房菌痛、資生堂ニ而付薬

廿日 ○十一月三日附清雄書状廿日到来

廿一日 ○去暮より昨日迄三度之返事書状清雄方え長田え持参頼置

二月三日 ○杉浦絵三枚受取帰る

七日 金松え封物頼

八日 林斎ノ画三木持参

八日 河原え封物二ツ頼

九日 成島え一封頼

十一日 ステイションえ参り、成島平山金松河原仏国出立ヲ見送ル、松岡より近藤え参る、金「」受取四谷え一円上□月一

円上ケ残り壹円、近藤ノ三円預り有之

（薬診表）

（医名） 一月四日 賀川氏、渡辺え長風邪 九日見廻 代済

（丸薬） 同日二日分 六日同 八日同 十日同 十二日同 十四日同

同

（散薬） 父上□二日分 十六日同

（水薬） 長一日分 五日六日二日分 七日二日分

（紙薬） 三十一日十包たま

（水薬） 廿一日一日分 廿三日廿四日丸薬八粒ツ、廿七口水

廿三日同断 廿五口水丸

三月四月

（入金高）

三月三日 小袖ニツ渡辺より借用、イセやえ遣ス、四円 右小袖入

六日 ★貳円 中野より

十日 ★三元 中野より

十九日 三十円 月給

★貳円 中野ヨリ

廿九日 ★十円 中野ヨリ

十四日 一、三元 りかより借用

三十一日 拾四円 賀川氏ヨリ賄ニ受取

四月三日 ★二分二朱 イセやえ、黒呂羽織

五日 ★三元 中野ヨリ借用

八日 ★三十円 賀川ヨリ借用

★十五円 池田ヨリ、同九月迄九月書替

八日ヨリ十日迄 御香奠至来 四十二円 所々より

十一日ヨリ十三日迄 至来御香奠 八円五十五銭

十三日 ★二十円 一夢より借用

内★十円 七月十日迄本多え送ル事

★十円 出来ノ節留置申遣ス事

十八日 三十円 当月々給受取

★「」円 真一郎ヨリ、六月皆済

★□五円 池田より七月迄ノ新キ

（出金高）

廿日 三円 十二月倉地ヨリ十円借用ノ内返シ

二円 渡辺ヨリ先月十円借用ノ内返ス

五円 六日十日中野ヨリ借用返ス

廿三日 貳円 中野え戻ス

十日頃 五十銭 渡辺え戻ス

十六日 五十銭 りかえ返ス、五円借用済切



四月三日 一円三歩 イセヤえ、羽織布子二品出ス  
九日 拾円 母上様「」三ツイセヤヨリ出ス、但亥年七月ヨリ

当四月迄利子入レル ○五円六十銭右利子

十六日 五十銭 りかえ戻ス、明治九年四円母上様え御用立之内  
十七日 十五円 八日賀川ヨリ三十円借用、半金戻ス  
十九日 二円五十銭 渡辺え戻ス、残□五円  
廿日 二円 十二月倉地ヨリ借用十円ノ残返シ済切  
十五日 十五円 池田え戻シ、書付新キニナル、但一月借用分

(来客)

四日 石川「」川え参る、帰り荒井「」

十三日 一夢来ル

十九日 おぬい来ル

(他行)

五日よりおたま四ツ谷え参り泊り

(事故雑記)

一、一月十五日出清雄ヨリ之書状来ル

廿二日 一、清雄え之書状長田え持参頼

四月二日 一、昨年沼津え送ル五神錠代二円母上様え夢ヨリ上ケル

廿一日 一、清雄え之書状長田え頼、御病死之事申遣ス

(薬診表)

(医名) 加川 六日見廻二度 九日 十一日 十二 十四 十五

十七 廿日 廿二 四月七日 林十二日

(水薬) 七月初而二日分父上 九日二日分 十一日一日分 十二日一

日分 十三 十四 十五二日分 十七同 十九□日分 廿一

日同 廿三日同 廿五日同 廿七日同 廿九日同 三十一日

同 代済

(丸薬) 十二日ヨリ日々三十一日迄 四月一日ヨリ日々七日迄

(水薬) 四月二日二日分 同四日同 同六日同

五月六月

(入金高)

五月七日 ★三十円 外山ヨリ借用

十日 ★六円 冬物イセヤ預ケ

十五日 ★七円 渡辺ヨリ借用 済

十八日 三十円 月給受取

廿六日 ★十円 近藤ヨリ七月迄ノ約

廿七日 ★二十円 奥田ヨリ

六月七日 三十円 小杉ヨリ、加印寛裕富彦、十円二付廿五銭ノ利、

十月迄ノ約

十八日 三十円 月給受取

十二日 ★五円 渡辺ヨリ借用

十六日 三円五十銭 浄土寺無尽セリニ而取、但今日マテ九円掛ケ

卅日 拾五円 賀川氏ヨリ賄方ニ受取

(出金高)

五月十日 五円 十二月預ケ給單羽織出ス

八日 七円 三月中野より十円ノ内返ス

二 二円 渡辺え戻ス、残り三円

十六日 五十銭 りかえ返ス、但四円ヲ先月ヨリ返シ、残り三円

十八日 三円 中野ノ方え戻ス、三月借用十円ノ残り皆済

廿一日 十五円 賀川え戻シ済切

廿九日 八円 真一郎え戻し、残り七円アリ

廿九日 四円 十二月十八日入帷子単物四品出ス

同日 三円五十銭 同三十日入帷子単物四ツ出ス

六月十日 十一円 途中紛失

十六日 五十銭 りかえ返す、但四円ヲ四月ヨリ戻シ、残り二円  
五十銭

十九日 拾円 四月借用廿円ノ内和多田□え返す、但為替ニテ本多  
え渡す、受取書取沼津え廻□

と 七円 十五円借用真一郎え戻す、皆済

（事故雑記）

五月十四日 一、三十銭五厘渡辺原籍区入費、本郷永福寺え持参、  
上野道治え渡す

十五日 一、同人金禄利子廿一円東京府え出受取来ル

十九日 一、父上様御死去之段静岡え之届書二枚永福寺止宿上野道  
治え郵便ニ而差遣す、尤過日咄合候事

廿三日 一、イタリヤえ届物三封今朝長田え持参頼置

（次行）「内は全文削除。明治十二年五月に記入すべきところを誤って挿入か」

「五日 一、渡辺今度此方え同居之「」本日引移ル

一、本日丈ヶハ飯米其外買□ル

一、本月ヨリ月々三円ツ、差入候積リ」

備忘

六月七日 昨十二月松岡「」戻ル三円受取不届借用置□本

日同家え持参相渡す

同九日 一、四月六日出清雄書状吉田より届来ル

十一日 金松隠居来ル

十七日 一、清雄書状五月出十七日到来

（薬診表）

賀川 お長見廻

七月八月

（入金高）

七月十八日 三十円 月給渡

廿九日 ★一、十五円 池田ヨリ書替新キ、十一月迄ノ約定

八月三日 ★四円 メイセン小袖唐サン口綿上田縞裕メ三

★一円廿五銭 紋付帷子一シホリ湯浴一、右伊勢屋え遣

す、卯十月新キ

七日 ★五円 中野ヨリ借用、廿一日戻す

十九日 三十円 当月々給受取

（出金高）

七月十六日 五十銭 りかえ戻す、但四ノ内残二円半

廿九日 十円 近藤より五月借用返す

廿五日 一、二円 和多田え返す、但伝馬丁え渡シ、残り三円、八  
月廿二日戻す、壹分二朱同所え利、廿銭同所え

看代、壹分正見寺え籠花代、メ三分七銭五リン、

右一夢え返シ候分

廿九日 十五円 四月池田より之返す

八月十六日 五十銭 りかえ返す、但四円ノ内残□円

廿一日 三円 渡辺え返す、但二月借用十円之口皆済

同日 五円 去ル七日借用中野え返す

八月廿二日 三円 伝馬町え持参戻す

三十日 壹円 五月渡辺より七円借用之内返シ、残り六円

三十円 賀川え利「」シテ送ル

（事故雑記）

七月十九日 一、松岡より近藤え之六円去十二月分差越シ。廿九日

三円持参相渡す

廿一日 一、イタリヤえ書状長田え持参頼

八月七日 一、沼津え書状出ス

七月廿五六日頃 一、イタリヤより六月六日認書状来ル

八月十日 一、沼津より五日状来ル

十一日 一、右返事出ス 十九日 同出ス

十九日 イタリヤえ書状出ス、長田え頼

八月十七日 渡辺公債「」 「廿一日出頭候様東京府「」」達

来ル

廿日 公債証書受取ニは委任状無之而は不相渡由ニ付、去ル六日書

状申遣候処、本日印紙三枚差越ス

廿一日 渡辺公債証書御渡達書之委任状区務所え持参、見留ヲ取東

京府え出頭、五百円一枚百円一枚受取帰りお謹え渡ス

廿一日 一、おぬい箆笥富士見町江原え渡ス

(欄外)

「廿九日よりおたま渡辺え泊り臥居

八月廿三日夕 六月廿二日出清雄書状来ル

廿三日 石橋箱館え出立致ス

同日夜 竹橋砲兵乱妨

廿六日 章三方え廿一日公債証書受取候義書状ヲ以申遣ス

一、清雄より酒巻え書状参り候間本日遣ス」

九月十月

(入金高)

九月二日 ★弍円 伊勢ヤヨリ、明石チヅミ帷子同紋付越後紋付メ

三ツ

五日 ★四円 伊七屋より、おたま帷子単物メ五ツ遣し

十一日 ★三元 伊七屋より、お長帷子一おきん同二ツカリ遣ス、

★一、三円中野ヨリ借用

十八日 三十円 九月々給

廿九日 ★十五円 池田ヨリ借四月ノ書替、二月迄

十月一日 ★四円 渡辺ヨリ借用小袖二新キ入レ直し

★一円五十銭 メイセン小袖入

五日 ★六円 渡辺ヨリ借用

十四日 ★二円 りかより

十八日 三十円 当月々給受取

十七日 ★廿円 羽山ヨリ借用

廿一日 ★廿円 高橋世話借用

三十日 ★十五円 イセヤヨリ、小袖羽織帯反物単物袴メ十二

(出金高)

九月六日 五十銭 渡辺え返ス

十二日 壹円五十銭 同断、七円ノ口残四円

十六日 五十銭 りかえ返ス、但残一円半

十八日 三元 十一日中野ヨリ借用返ス

十九日 二元 渡辺え返、残二元

三十日 四円 三月三日入小袖二利入出シ、但渡辺より借衣類十月

一日より又入レル

同 四円 八月三日入給小袖出ス、利済

十五日 池田より四月書カへ返し又書替

十月六日 四円十七銭五厘 一夢え戻シ、但四月廿円借用是二而皆

済、此金渡辺武定え渡ス

同 一円三十二銭五リン 一夢「」用立

十六日 五十銭 りかえ返し、但残一円、此一円済

十九日 二元 渡辺え返ス五月七円借用是二而済切

同 二元 りかえ返シ十四日借用皆済

廿日 三十円 六月小杉ヨリ借用返金皆済

廿五 一円五十銭 一日入メイセン小袖出し

廿七日 二元 六月十二日渡辺ヨリ借用五円ノ内返ス

（事故雑記）

九月四日 一、甲良匠夜八時病死、五日為知来ル

七日 一、おたま番町え帰る

六日 一、整理部松浦久手紙二而清雄履曆書差出候様本局より達有

□旨達来ル

九日 一、清雄履曆書紙幣局え持参、松浦久え相渡ス

十二日 一、佐田清次昨日参り申聞義二付今日得能氏え参る、面会

致ス、同局出来ノ画四枚到来致ス

十三日 公御所戸田之返事新兵衛え向出ス

十六日 イタリヤえ之書状長田え持参頼置

九月廿一日 紙幣局佐田「一」ヨリ文通二而イタリ国より相廻り

「一」有之面談致度候間明廿二日午後二時頃製造場

え出頭致し候様達来ル

廿二日 昨日達二付出頭、佐田え面会之所、清雄油画二枚水画一枚

為見、油画出来方宜候間、過日談之廉ト違専ら油画修行致

し候様致し度旨局長申候旨申聞ル

廿九日 イタリヤえ書状出し右之事申遣ス、廿日出

（欄外）

「十月六日 紙幣局え小野荒木同道縦覧致ス

十八日 イタリえ書状廿一日出日二付、長田え持参頼置、酒巻ノ書状モ封込

十九日 一、沼津え五十入書状出ス、同所ヨリ十五日出書状到来

廿日 右返事出ス」

（薬診表）

（医名） 一日 二日 見廻賀川 四日 六日 七日

（水薬） 一日 二日 三日 四日 五日 六日 七日

（ヌリ薬） 一ヒン五日

十一月十二月

（入金高）

四日 ★十円 渡辺ヨリ借用

十一日 ★三円 拾二ツ イセヤ

十八日 三十円 当月々給

廿二日 十五円 近藤ヨリ借用、同日元四月借入七月書替、又今日

書替

★十五円 池田ヨリ借用、来四月迄同月書替

十二月一日 五円 伊藤無尽当り納金受取

★二十円 佐藤より

（出金高）

十一月十一日 六円 五月十日入イセヤ、但黒羽二重羽織外三品出

ス

十六日 五十銭 リカえ返シ、残り五十銭

十九日 二円 六月十二日五円渡辺より借内返シ、残り四円済切

廿三日 ★三円 富士見町え用立

十五円 池田より七月書替ノ返し、直ニ書替来四月迄

廿四日 廿円 高橋え返シ

十二月十六日 五十銭 りかえ返シ、同年母上様御借用、是二而四

円済切

十九日 壹円 渡辺より六「一」借用之内返ス、皆済

廿五日 六十二銭五リン 四月三日入羽織出ス

一円 十月五日渡辺より借用六円ノ内返ス、残り五円

十円 奥田え返シ、残り十円、此十円済

（事故雑記）

十一月事故雑記

十四日 清雄仏国逗留中九月廿一日出セシ状、金松老人持参

十七日 一夢ヨリ十五日書状来ル、此方より七日ニ返ス返事ナリ  
 十二月八日 一、富士見町より植木鉢物来ル、盆数別紙ニ記ス  
 十三日 一、イタリやえ之状長田え持参頼

(薬診表)

(医名) 十六日高島 十七日十八日若尾

明治十二年 一月二月

(入金高)

一月十八日 三十円 月給受取  
 廿四日 ★二十円 三木氏ヨリ  
 廿八日 ★二十円 真一郎氏、内十円ヨリ返シ

★二円 おたま紹羽織其外三品メ

一月六日 ★二円 イセヤ 単羽織帷子反物メ三品

二月十八日 三十円 月給受取

廿四日 八十円 富彦殿より借用、但廿円ニ付廿五銭ノ利限り之約定、十二月迄ノ証楽遊証人、十五年二月半金入

★一、十五円 池田より借用、但書替

十一日 ★一、五円 羽織小袖三品、十二月出ス

(出金高)

一月十六日 五十銭 りかえ返シ、残り二円五十銭

廿日 三円 渡辺え返シ、借用六円

廿九日 二円 十月同家借用、済切

廿日 十円 賀川え利金

廿五日 十五円 同断

五円 奥田え返シ、残り五円、此五円済切

二月十六日 五十銭 りかえ返シ、残り二円

同日 五十銭 渡辺え「一」、十一月四日十円借用ノ口

十八日 二円五十銭 同断、同断ノ口残り七円

廿五日 五円 奥田え戻シ、皆済

同日 二十円 三木え返シ

廿六日 二十円 佐藤より十二月借用返金

(事故雑記)

一月十九日 一、松岡え参り、近藤え昨十二月受取金十一年前半

分六円受取

廿七日 一、宅地番号変換届郵便ニ而渡辺竹原倉地志村分出ス

二月十日 一、伊太利え書状十三日出ニ付長田え持参頼

三月四月

(入金高)

一円三十銭 吉岡より到来

一円 吉住ヨリ切手

五十銭 富彦より

十八日 三十円 月給

同 ★十円 渡辺ヨリ借用

★二十五円 越前屋ヨリ、証書トチリメン一着

四月十八日 三十円 月給

三十日 ★五円 イセヤヨリ、女小袖一茶呉呂羽織茶シマメイセン

小袖メ三

★十五円 池田より借用、昨年十一月ヨリ当月書替

(出金高)

三月三日 三円 渡辺え返シ、残り四円

四日 十円 真一郎え返シ、残り十円

十六日 五十銭 りかえかへし、残り一円五十銭

十八日 四円 渡辺え返シ、但十一月四日借用、皆済

四月十六日 五十銭 りかえかへし、残り一円

廿三日 三円 渡辺より三月借十円ノ内返シ、残り七円

と 壹円 志村え十円ノ□金当月ヨリ戻ス、残り九円

三十日 三円 十一月入給ニツ出シ

（事故雑記）

三月十日 一、イタリえ書状十二日出日ニ付、長田え持参頼置

四月十五日 左之品舟田え託シ沼津え送ル

一、麓のちり 有合ニ付遣ス、尤申越シ

一、名前ノ名寄一冊

一、てにをは細鏡一冊 有合ニ付遣ス

一、八印シヤツ

五月六月

（入金高）

二日 ★五円 伊セヤヨリ、綿入黒羽織一女小袖壹二重黒シス呉呂

羽織ノ四品

十日 ★二円五十銭 イセヤヨリ、八丈小袖一小納戸下着一メ二品

十八日 三十円 月給受取

六月四日 一円八十九銭 葉研払代

六日 ★四円 イセヤえ四品預ケ、アイ縞男小袖一更紗下着一八丈

女給一給女羽織一、十一月三日出ス

十二日 ★二円五十銭 伊セ屋より、男女給二男茶給羽織一メ三品

遣ス

十八日 三十円 当月月給

廿七日 ★一、七十五銭 張かへ物、右十八年三ノ四流ス

（出金高）

五月九日 二円 渡辺え返シ、残り五円

十九日 壹円 志村え返金、残り八円

廿七日 二円 一月入三品いセヤヨリ出シ、おたま羽織ゆかた帰宅

帷子

六月十九日 一、壹円 渡辺え返シ、残り四円

一、壹円 志村え返シ、残り七円

（事故雑記）

五月十日 一、塚本利子受取三十一円五十銭山形え廻ス

と十四日 一、渡辺利子廿壹円受取

一、清雄え之書状長田え持参頼

十五日 一、沼津上州え書状出ス

十七日 一、十五日出上州より書状到来

廿日 一、近藤え参る、夕官え参る

廿一日 一、小金井星野え参る

廿五日 一、星野老婆今正午病死之旨為知来ル

一、渡辺此方え同居相談ニ而去ル五日引越

五月廿三日 一、四十円 御叔父様より受取

と廿四日 一、三十円為換ル、十五銭 廿六日十円

廿五日 日曜日ニ付為換休

廿六日 十円為換、八銭

同日 書留ニ而右二通ノ証書沼津え出ス、八銭

六月七日 一、小金井え為悔備物料持参、本日参り夜二入り帰宅

同日 一、小金井より参る、小袖一単物壹為遺物持参、泊る

十二日 一、母上様近藤え御泊リニ被為入

（欄外）

「五月廿九日 一、一夢より被頼候寄書 和寄遠鏡八冊七十銭、鈴野集一冊廿

銭、兼而預リシヤツ一、右封シ飛脚仙七方え持参渡ス」

七月八月

(入金高)

十一日 ★一円五十銭 イセヤヨリ、たまひとへ物染返し反物帷子

六(日) ★廿円 佐藤ヨリ借用

十八日 三十円 月給受取

★五円 中野ヨリ

三十一日 ★二円 おとしより借用

十五円 池田ヨリ借用、書替新キ

八月七日 ★一、六円 富樫権七より借用、刀一脇差三本預ケ

十四日 ★一、一円 渡辺より借用、十六日戻ス

十六日 一、三十円 月給受取

一、二円 おとしえ戻ス

十二日 ★一、三円 帷子三

(出金高)

七月十一日 四円 寅九月入伊セヤヨリ出ス、帷子単物染物反物メ

五品

三円 同断、おきんお長帷子メ三ツ当人え返ス

一円 渡辺え返シ、残り三円

十八日 一、一円 志村え返シ、残り六円

廿一日 五円 佐藤え返シ、残り十五円皆済

八月十八日 一円 志村え返シ、残り五円

卅日 五円 佐藤え返シ、残り十円皆済

十九日 六円 富樫より刀出ス

三円 渡辺え返シ、三月十円借用返済し切

(事故雑記)

七月廿三日 一、廿五日飛脚出日ニ付、イタリや書状長田え持参頼

ム

八月九日 一、沼津え書状出シ、本多五円ノ受取相廻ス

十七日 一、永田町外務省御用地え吉田要作出居候由ニ付参り面会

致ス

廿八日 (記事なし)

九月十月

(入金高)

九月三日 一、壹円廿五銭 払物代、千字文箱入和蘭陀皿一枚箱入、

神保町道具や富樫源七え遣ス

六日 三円五十銭 同断、藤刀箱和ランタ焼皿明キ箱二ツ湯タンポ

鍋、大木戸道具屋

十八日 三十円 月給

廿日 ★元四円 イセヤヨリ、男帷子壹女同三メ四

廿日 一円五十銭 帷子単物

貳円 男帷子三、新キニナル、利済、十月ヨリ改

(欄外)

「十九日 一、十五円 池田ヨリ、書替当月ヨリ来二月迄」

十月

一、二円 琴払代

一、二円六十銭 屏風時計刀身一本其外払

一、七円六十銭 眼鏡大荒物重箱二組身二本

十八日 一、三十円 月給

一、五円 お松より借用、先月ヨリ

八日 二円 イセヤ、男帷子メ三

(出金高)

九月廿一日 一、十円 佐藤え返金、皆済

一、壹円 志村え元返シ、残り四円

廿日 貳円五十銭 イセヤ出ス、男女給ニツ男羽織ノ三品  
十月

一、壹円 志村え元返シ、残り三円

（事故雑記）

九月五日 一、兼而兄上様より土蔵え預り長持一、本日大谷木え御  
売渡ニ付同人引取、壺式ツハ中野引取候御約束、外  
預り品左之通

夜具一蒲団壹本箱壹鉄砲雛形箱入式ヒン箱入一刀二本  
袋入りノ八品

十一日 吉田要作より端書ヲ以、昨日伊国領事中島才吉帰朝之所清  
雄無事之旨申越候間、端書ヲ以返書致ス、中島宿所も吉田  
より被申越候

十四日 中島才吉方え参り面会候処、七月廿五日附清雄書状差越ス  
十九日 一、兄上様え中野より壺之代六十銭届ケル

廿七日 一、沼津和多田より廿三日出書状到来本日返事出ス、中野  
状も封込

十月四日 一、渡辺より便り有之

五日 表下水出来上り

六日 大野江原豆州ノ人来ル

廿七日 一、箱館渡辺え原紙遣し利子受取委任状取ニ遣し、別配達  
ニ而郵便出ス

十一月十二月

（入金高）

十一月三日 六円五十銭 イセヤヨリ、古ち、ミ帷子夏羽織ニツ女  
同壺木綿ち、ミ単物一八丈女給一上田男  
給壺ノ六品

十七日 三十円 月給  
十二月十七日 三十円 月給

廿六日 ★三十円 佐藤ヨリ借用、一月ヨリ四月迄月割ニ返金役定

利前金

廿九日 ★拾円 おきんより借

三十一日 ★十円 同断

同 ★二円 イセ屋、黒羽織ニツ

★十五円 池田より借入、書替五月迄

廿九日 三円五十銭 イセヤ、ゆたん引トキ物、十八年三ノ四流ス、  
二円五十銭黒朱子小巾帯同断

（出金高）

十一月三日 四円 小袖其外四品出ス、当六月六日入

廿日 五円 四月三十日入三品イセヤヨリ出ス

十二月

一、拾五円 池田え返シ書替

一、壹円 中野え返し、残り四円後済

（事故雑記）

十一月七日 一、章三箱館より五日出立本日着舟、夜十一時頃無滞  
帰宅

十三日 一、外山ニ而出産男子出生之旨、隠居夜十一時頃参り申聞、  
直同道おたま参る

十七日 一、イタリヤえ十九日出る二付、書状認長田え持参頼

十二月十日 一、小林徳松えお長縁組整ひ結納、本日賀川より届一  
円三十銭来ル

円三十銭来ル

廿一日 一、お長引移り済

廿四日 一、渡辺箱館え出立致ス

三十日 一、渡辺家作西郷篤信え売渡シ、本日金子六十円受取仮証



書遣ス、一月二到り取引之積り

明治十三年 一月二月

(入金高)

一月十日 ★一、五円 イセヤヨリ、黒紋付小袖一小納戸下着同一

仙台平袴裏トモヒキトキ一メ三品

十七日 一、三十円 月給受取

二月三日 ★一、壹円 イセヤヨリ、茶呉呂羽織袴遣ス

四日 ★一、五円 中野世話ニ而小林屋ヨリ、十二日ニ皆済

八日 ★一、三元 伊勢屋ヨリ茶拾羽織八丈小袖メ二品遣ス

十二日 ★一、三十円 加藤時雍ヨリ三木氏世話、但月々十円ニ付

廿五銭ツ、利五月迄ノ証書中野証人、十三

ノ三済

十七日 一、三十円 月給受取

★一、十五円 池田ヨリ借入、七月迄ノ約

(出金高)

一月十八日 一、七円五十銭 佐藤え返金、去十二月借用三十円内

金戻ス、残り二十二円五十銭

一、壹円 志村え返シ、先年十円借用、是ニ而皆済

二月十二日 一、五円 去四日小林屋ヨリ借用、元利皆済

十二日 一、二円 昨七月中野ヨリ借用内返済、去暮一円返シ、残

リ二円モ後済

十四日 一、三元 茶拾羽織八丈小袖出シ

十八日 一、七円五十銭 佐藤え返シ、三十円ノ口半金済、残り半

金モ済切

十五円 池田え返金、書替

(事故雑記)

一月十一日 一、松岡譲三井物産会社え被雇、本日箱館え出立ニ付  
相越候処、来ル十四日ニ延ヒ

十三日 一、渡辺家作取引本日済、下書外ニ仕廻置

二月三日 一、イタリヤえ初便書状長田え持参頼置

十三日 一、十二月廿四日附清雄書状并写真二封、三輪甫一昨日イ

タリヤより着之由ニ而、長田ヨリ届ケ来ル

十五日 一、三輪え参り面会致ス

十七日 一、イタリえ書状長田え頼出ス

三月四月

(入金高)

三月十七日 一、三十円 月給

廿八日 ★一、十円 中野より、小林屋元金

四月七日 ★一、廿五円 おとし世話越前屋より、利新キニナル

十七日 一、三十円 月給受取

廿一日 一、佐藤え三十円ノ残可戻所、都合之悪ク来月え延シ申込

承知、七円五十銭え別二五十銭利ノ足ニ遣シ八円ノ所

□二円先方ヨリ受取、十円新キニナル

(出金高)

三月廿六日 一、七円五十銭 佐藤え返金、残七円五十銭

四月廿一日 一、七円五十銭 佐藤え返金

同日 一、十円 小林屋え返、中野え元利相渡ス

(事故雑記)

三月一日 一、植木屋来リ植替物致ス

七日 一、同断、継穂も致ス

十七日 一、同断二人、裏葡萄棚ムベ棚其外

廿一日 一、同断壹人、鉢前柿ノ継木

十五日 一、村垣淡斐病死

廿五日 一、小林仙台鎮台え相越候様被命候由

廿六日 一、朝小林来ル

四月三日 一、小林本日出立、午後横浜え相越し、銀浦丸え乗込、

仙台野蒜より上陸之積り、右ニ付品川迄送り、同所

止車場ヨリ上り三崎町迄帰り、夫より帰宅

四日 一、三崎町小林宅片付、お長并道具共引取、跡家主え引渡ス

十二日 一、仙台小林ヨリ八日出状来ル、三日風順ニ付五日乗船六

日出航八日仙台え着之旨申越ス、二日ニ出候荷物尙未

着無之由

廿一日 一、清雄え届物可致狩野友信申聞候間、本日持参頼荒井書

状入遣ス、鍋嶋直大君え随行二等書記百竹え頼候由

云々

廿九日 一、お長鴨脚え今日より参る

五月六月

（入金高）

三日 ★十五円 池田ヨリ借入書替、来ル十月迄

七日 ★三元 伊勢屋より、黒羽二重羽織一琉球ツムキ小袖一メ二

品

十一日 ★一、五円 女小袖二ツ同下着一メ三

★一、四円五十銭 羽織其外六品遣ス、今日出シ拾一ツ貫

六品入レル

十七日 一、三十円 月給

廿日 ★一、三元 イセヤヨリ、アイ縞男小袖八丈女袴メ二品

六月十三日 ★一、三元五十銭 イセ屋ヨリ、フドウ鼠女綿入羽織

メイセン小袖女メ二品遣シ

十七日 一、三十円 月給請取

廿五日 ★一、四円廿五銭 イセ屋ヨリ、お長小袖袴浮織御召立縞

同 ★一、壹円七十五銭 同所より、茶裕羽織袴たま裕同袴メ二

廿七日 一、七十五銭 同所ヨリ、鼠縞ち、み中洋織紋付反物一品

（出金高）

五月十一日 一、六円五十銭 十一月三日入出ス、単物羽織其外七

品出ス、利払

廿日 一、四円五十銭 去ル十一日入レ出ス、スキヤ羽織其外六品

出ス

★十円 池田より五月借、但書替

（事故雜記）

五月一日 近藤有孚大坂え本日出帆帰る、富士山着、谷同道帰ル

一、内田本曾え出立

八日 一、大久保学而ヲ、スタリえ参り、十四日出帆イタリヘニー

スえ立寄ル由ニ付、届物二封持参頼、ホツス貝錦画銅判

靖国神社ノ景二重橋ノ景二枚新聞三冊香箱一小土ビン一

釘サシクシ其外二三品味付ノリ二管遣ス、お玉文も入レ

ル

十一日 一、天野可春来る、伴富太郎来ル十三日出立仏国え参候旨

二而、届物有之候ハ、差越候様申聞ル

十二日 一、大久保出立延ヒ廿八日ニ相成候由承候間、同人え頼候

一封大之方取戻、天野持参相頼ミ、留太郎えも初而面

会致ス、右頼候品味付海苔二管香箱え品々入、團々二

冊外二二冊入頼

同日 一、十四日仏舟出航之由ニ付、清雄え書状認、長田え持参頼

廿五日朝 一、学而参り、弥廿七日出立之由申、一同面会致ス

廿七日 一、一昨日風月堂羊かん五棹学而え頼置、弥本日出立ニ付

七月八月

(入金高)

横浜迄送り、午後七時乗込二相成、大久保父子同道帰  
ル、横浜宿弁天通り二丁目西村新七方  
廿九日 一、小林ヨリ書状ニ而出、前出候荷物未着無之旨申来候ニ  
付、三十日万代橋内佐々木利助え参り申談候処、早々  
取調候旨申聞ル、仙台野蒜潜ヶ浦阿部駒太郎方え送り  
候旨ニ付、其段三十一日小林え返書出ス

七月九日 ★一、十円 外山ヨリ借用

十二日 一、二円五十銭 イセヤヨリ、上布女帷子男単物帯メ三品

同日 ★一、四円五十銭 同、男袷羽織布子衿メ三

十七日 一、三十円 月給

三十日 ★一、三円五十銭 イセヤヨリ、おとしより八丈小袖借用

★一、十五円 池田ヨリ借入書替、十二月迄

廿五日 ★一、四円 イセヤヨリ、女小袖二

八月二日 ★一、四円五十銭 イセヤヨリ、おとし糸織小袖借用

十日 ★一、三円 中野ヨリ借用

廿三日 一、三円 道具長持払代

廿八日 一、二円廿五銭 良造月俸受取、七月十五日ヨリ八月廿一

日迄

三十日 一、四円 六月分小林ヨリ来ル

(出金高)

七月十一日 一、四円 卯九月廿日入イセヤ帷子四ツ出し

廿六日 壹円廿五銭 イセヤ卯九月入帷子一ゆかた一出シ

八月廿二日 一、二円 中野え返シ、昨七月五円借用此度済切

(事故雑記)

九月十月

(入金高)

七月(記事なし)  
八月八日 一、藤野氏来り、吉岡ト杉本縁談之義申聞  
十日 一、同氏より手紙到来  
十一日 一、吉岡え参り、夫より杉本え参る  
十二日 一、藤野え返書出ス  
一、去月六日江原より書状ニ而馬具之事依頼、右返書本日  
出ス

五日 一、三円七十五銭 御前物無銘拵付刀銅トツコ壺添払代、大

木戸道具屋え遣ス

八日 一、五十銭 近藤より中人札

一、一円廿銭 酒四升代、吉岡ヨリ到来

廿五日 ★一、廿五円 越前屋ヨリ証書トチリメン、四月入今月迄

ノ利三円遣シ新キニナル

十月一日 ★一、三円 伊せ屋ヨリ、紋付鼠帷子一ち、ミ羽織張之

儘一反たまスキヤ帷子一同黒紗羽織一メ四

品

★一、三円五十銭 同断 フトウ□リ袷羽織一玉袖見ジ

ン小袖一茶メイセン同一メ三品

★一、三円廿五銭 同断

五日 一、三円 イセ屋ヨリ、長ノ帷子二ゆかた一メ三ツ

十日 一、七円 兼元小サ刀具足櫃其外払代

十八日 一、三十円 月給受取

(付箋)

三十一日 ★一、六十円入 渡辺百円証書借用荒井え遣シ借用、但利二十円

ニ付廿五銭ノ割月々入レ六ヶ月書替積リ、証書  
入置、四月書替」

（出金高）

九月廿五日 ★一、廿五円 越前屋返シ、利三円入

一、壹円 八月中野ヨリ借三円ノ内返済、残り二円

十月一日 一、一円七十五銭 イセヤ、裕羽おり一たま同一出シ

一、四円五十銭 同、羽織給其外三品出シ

一、壹円 八月中野ヨリ借用三円ノ内返シ、残り一円

廿七日 一、三円五十銭 イセヤ、当月入羽織小袖三品出ス

三十一日 一、廿五円 越前屋より証書反物出シ

（事故雑記）

九月八日 一、種物代江原ノ立替小川町え上ケ、十六銭五リン内飛

脚四銭五リン

十日 一、武札幌より昨日帰り候由ニ而来ル

廿二日 一、昨日認賀川籍之義ニ付朴叟え書状出ス

廿四日 一、沼津一夢え書状出ス、洋服勘定申遣ス

十月十一日 一、長屋用ニ而静岡秋田え書状出ス

廿一日 一、右返事出来ル、賀川送籍証来ル

廿七日 一、右返事川口秋田え出ス

廿八日 一、右之段前橋え書状出ス

一、前橋より昨日出書状来ル

十六日 一、昨日和多田え向江原馬具并和多田え戻ス洋服等入仙七

え渡シ、其段同人え本日書状出ス

十一月十二月

（入金高）

十一月一日 ★一、五円也 イセ屋ヨリ、茶給羽織男給女給単物二

ツメ五品

九日 ★一、三十円 荒井ヨリ、利子廿円ニ付廿五銭ツ、毎月入、

来四月迄ノ証書入、受人倉地

十七日 一、三十円 月給

十八日 ★一、十円 池田ヨリ新キ借用、内五円返済

十二月十七日 一、三十円 月給

★一、十五円 池田ヨリ書替、来五月迄

廿日 一、四円 小林ヨリ七月分差越、此月限り

廿二日 一、二円五十銭 本払代

廿三日 ★一、四十円 越前屋新蔵、拵付国光脇差添状付五百円交

債証書一通

廿九日 三円五十銭 油タン二更紗二切引トキ物壹

二円五十銭 黒朱子帯イセヤえ遣シ

（出金高）

十一月十八日 一、五円 池田え返金

廿二日 一、一円 八月中野ヨリ三円借用返シ、済切

十二月七日 一、五円 池田え返金、残り五円、一月済

廿五日 一、十円 加藤え返金、二月十三日三十円借用内金

廿九日 一、三円 五月七日入綿入羽織小袖出ス

一、五円 同十一日入玉小袖一長小袖下着共出ス

一、四円 七月廿五日入玉小袖上下ニツ出ス

一、三円五十銭 同三十日入八丈小袖としえ返ス

廿三日 一、廿五円 四月入越前屋より証書出ス

（事故雑記）

十一月一日 沼津より昨日出ノ書状来、先々月廿四日先月十六日出

候返書来ル、十日出十一日到来、十三日返書出ス

二日 一、前橋より書状来ル

十六日 一、言葉ノちりひぢ十冊仙七方え持参、沼津え出ス

十七日 一、一夢より書状来ル

十九日 一、彫刻部より郵便二而、清雄より油画相廻り候間為受取

出頭候様申来候二付、直ニ出頭、栗山考三ヨリ受取、

受取書ヲ出シ、帰り局長殿え礼ニ参り、帰宅

一、十四日出之書状塚本より来ル

明治十四年 一月二月

(入金高)

一月六日 ★二十円 越前屋ヨリ、十二月四十日借入ノたしメ六十

円、四十円利済、当月ヨリ、新キ

十七日 三十円 月給

★六十円 越前屋ヨリ、証書五百円国光脇差遣シ新キ

二月九日 三円 松岡ヨリ

十四日 ★一、六円 長小袖上下ちりめん紋付、右二品イセヤえ

十七日 一、三十円 月給受取

(出金高)

一月 一、五円 池田え返ス、昨年五月十五円借、皆済

(事故雑記)

一月十九日 一、沼津え書状出ス

二月五日 一、近藤え年始兼妻離別相談ニ参候

五日 一、梅田え参り、離縁之事申入置

一、帰り二田中平七方え参り、右之趣申聞置

一、一夢より三日出之書状到来

七日 一、右返書出ス

七日 一、イタリイえ之書状大久保氏え頼、外務省え出ス

九日 一、田中参る、梅田同人方え参り、小林え離縁之事申入置候

間、同家より直ニ此方え返答有之旨申聞ル

二月十二日 一、小林直来ル、昨日端書差越ス

十一日 一、夜和多田類焼、加藤同断

十二日 一、和多田加藤え参る

十九日 近藤え行 後

十五日 小林え行 前

十六日 柳原横町より出火

廿一日夜 一、裏簞笥町より出火

三月四月

(入金高)

三月六日 ★一、壹円 おきんより借用

七日 ★一、二円五十銭 伊せヤヨリ、琉球袖小袖壹遣シ

十日 ★一、廿円 長田ヨリ借、六月迄、証人大久保、八月十円返

ス

★一、三円 イセヤヨリ、八丈小袖茶呉呂羽織二品遣シ

八日 ★三円 中野より

廿三日 ★一、貳円 黒沙後御紋袖金巾裕羽織帷子単物五枚メ七品、

右おとしヨリ借イセヤえ遣ス

同 ★一、五円

廿三日 二円五十銭 イセ、浅黄幕一張、十八年三ノ四流ス

(欄外)

「十七日 三十円 月給

三月廿八日 一、三円 布衣払」

四月三日 ★一、五円 イセ屋ヨリ、黒羽二重綿入羽織お長小袖二

ツ下着一メ四

十日 ★一、四円 イセ屋ヨリ、お玉小袖一遣ス

十七日 一、三十円 月給  
三十日 ★一、一円 イセ屋ヨリ、黒八羽織表一  
（出金高）

三月十日 一、廿円 加藤え返金、昨年二月十三日三十円借用内  
十二月十円返シ、此度皆済  
十八日 一、三円 中野え返ス、昨八月借

★一、一円 おきんえ用立  
★一、五十銭 同

（来客他）

三月五日 小林直来ル  
十二日 田中平七来ル  
十五日 重右衛門来  
十六日 おまき腹帯其外持参  
同日 田中え右并書付持参頼  
十九日 田中梅田ヲ誘引小林え参り、和ノ扱申入候処、聞入無之由  
帰りニ参り申聞ル、廉書は同人手ニ有之、直ヨリ受取書来  
ル

廿一日 池田え書状差出ス  
廿五日 近藤え参ル  
廿七日 直近藤より此方え参ル、置手紙致ス  
廿八日 直え昨日之返事出ス、其段近藤えも申遣ス

（事故雑記）

三月六日 一、上原婦水病死致ス  
十七日 一、前橋え書状出ス  
廿一日 一、同断  
一、加藤孫三郎え返書出ス  
廿五日 一、前橋より書状到来

三十日 一、和多田より之三円え書状添本日素宮方え持参、当人え  
渡ス

四月三日 一、沼津前橋え書状出ス

五日 田中同道小林え参ル

六日 駒場え参る

八日 おけい十右衛門来り同道、巴町勧解え出ル

九日 同断、帰りヨリ直方え参り、おけいヨリ国太郎え印形渡ス

十一日 昨日依田国太同道駒場え参り候由、今日巴町え三人出済口  
出ス、夫ヨリ大谷木え参ル

十二日 朝紺屋町高橋一勝方え参ル ○おけい重右衛門来ル

十三日 依田え参ル

十四日 目黒え参ル△

（欄外）

「四月一日 一、直夕刻近藤え参り、帰り掛ケ立寄

二日 一、おけい重右衛門参り、昨日直参り国太郎同道参り候由云々

同日 一、夕直より書状差越ス

三日 一、返書遣ス」

「△十五日 兄上様方大谷木一方え参ル

十七日 国太郎十五日駒場え可参処今以不参旨申来ル、返書出ス

十八日 国太郎帰宅之旨申来ル

十九日 近藤え行、国太郎今日深川え越ス由

廿三日 重右衛門深川え参り、同日跡ヨリ直国太郎駒場え参り泊り候由

廿五日 おけい重右衛門参る、十九日国太郎小松山え参り泊り候由

廿六日 おけい昨日管え参り泊り、今朝立寄帰宅」

（付箋）

「廿七日 夕国太郎直駒場より帰りニ参る、金子遣ヒ払不足旨申聞ル

廿八日 早朝駒場え参り、勘定調之事申渡シ ○同日おまき来り泊ル」

(薬診表)

四月

(医名) 十日十二日 石井見廻 十五日 廿四日

(丸薬) 一日二包 十日 十二日 りカ二日 廿六日 廿九日二日

分

(散薬) 廿八日二包

(水薬) 二日ツ、十日 十二日 十四日 十六日 りカ二日分

廿四日 廿六日 廿八日一日分 廿九日二日分

(膏薬) 一頁 十日

(□薬) 十二日

五月六月

(入金高)

三日 ★一、三円 イセヤヨリ、長羽二重小袖一

★一、八円 イセヤヨリ、糸織小袖一下着ニメ三おきんより

借用

十七日 一、三十円 月給

★一、十五円 池田ヨリ新キ書替ニテ

★一、三十円 昨十一月荒井ヨリ借用書替

六月十三日 一、十五円 近藤おけい殿ヨリ、内々頼借仮証書入

二日 一、三円五十銭 男女帷子、イセヤ

同 ★一、四円 裕羽織同男物

★一、八円 おきんヨリ借用

八日 ★一、四円 メイセン小袖更紗下着メ二

(出金高)

五月三日 ★一、三円 おきんえ用立

十七日 ★一、三円 おきんえ用立

一、十五円 池田え十二月借返シ書替

一、十円 昨十二月池田ヨリ書替又候本月書替

六月十八日 ★一、三円 おきんえ用立、廿四日返ル

六月末 一、八円 おきんより借用返ス

(来客他)

二日三日 重右衛門来ル

四日 国太郎来、不在不会

五日 駒場え書状出ス

六日 おけい参る、泊る

四日 小松山え参ル、面会

十日 重右衛門ヨリ午前後「」書状二通同日夕十一日朝二届

十二日 依田ヨリ国太郎方え参ル

十三日 駒場え一封ヲ出ス

十四日 重右衛門来リ、田畑上リ書付持参

十九日 同人来ル、大竹え預ケ地券借用証トモ大竹ニ而被盜候旨申

聞ル

廿三日 国太郎参候様ハカキ出ス

廿四日 おけい来ル、昨日国太郎駒場参り候由

三十一日 松岡より六円来ル、近藤え八月五日渡ス

(事故雑記)

五月一日 兄上様一番丁五番<sup>(空)</sup> 邸内え引越シ、右ニ付小川町ノ方

え参ル、当二日ニ一番丁え参ル

二日 一、章三方え書状出ス

六日 一、荒井百円ノ利子札切取持参

十三日 一、越前屋五百円ノ利札切取持参

十一日 一、明日洋便有之由ニ付、書状認メ大久保氏え頼

廿七日 一、長田え植木ヒバノ類二本ロウバイ一マイカイカ一サル

ヒヤ預ケ

（薬診表）

（医名） 二日見廻 五日 十二 十八 廿六

（丸薬） 一日二分 三日同 おきん廿七日

（散薬） おきん五日一伏

（水薬） 一日二分 三日同 五日 七日 二日おきん二分 五日

七日 九日 十一 十三 十五 十七 十九 九日 十一

十三 十五 十七 十九

（煎薬） 廿二日 廿三日 廿五日 廿一日 廿三日 廿五日

七月八月

（入金高）

二日 ★一、五円 男女帷子二小タチ同一、倉地ヨリ借イセヤえ遣

ス

九日 ★一、五円 イセヤヨリ、メイセン男袴ツムギ羽織綿入女羽

織メ四品

十四日 ★一、二円五十銭 イセヤヨリ、おとしヨリ借白羽二重男

袴

十八日 一、三十円 月給

廿四日 ★一、八十円 渡辺ヨリ借用、残り廿円受取、右ハ証書荒

井え預ケ右金用立被呉候

★一、五円 越前屋え国光脇差預ケ

廿八日 一、百六十円 渡辺ヨリ借用

一、廿円 荒井ヨリ借用

（付箋）

「七月廿七日 ★一、二円 イセヤヨリ張替物布子単物二品遣シ

同 一、四円 同断、帷子単物メ二

同 ★一、一円廿五銭 同断、縮面母上様羽織

八月十三日 一、二円八十銭 道具払代大谷え

十七日 一、三十円 月給

廿四日 ★一、壹円廿銭 母上様より

一、一円五十銭 りかヨリ

★一、三円 中野ヨリ

廿八日 一、三円 としより

一、貳拾円 外山より、内十円済

（出金高）

七月十九日 一、二円 去ル二日おとし借用帷子三出シ、同人え返

ス

廿五日 一、六十円 越前屋え五百円証書国光脇差出ス

廿八日 一、八十円 荒井え戻シ利済、但証書取戻シ渡辺え渡ス

一、六十円 昨年十月渡辺公債証書ヲ入荒井□借用、右金

同家え戻シ「一」ハ渡辺え戻ス

八月廿五日 一、十円 長田え返金、但十円残り、十五年二月済切

（事故雑記）

七月一日 直来ル

五日 国太郎来ル

七日 小林ヨリ書状来ル

九日 目黒え右手紙持参致ス

十日 今日小林え可参申遣候処、□倉え参候旨ニ而留守ト申

「一」

（次行一日から十九日は七月か）

一日 浄土寺本堂出来二付被招参ル

三日 正受院来リ、寄進之事申聞

八日 正受院え二円寄進之旨申遣ス、富彦氏一円



十七日 素六ヨリ十三日出書状返書出ス

十九日 一、夢え水シヤボン一筒賃先払二而麴町相模屋え出ス、同人え書状出ス

七月十九日 一、近藤兩人池田深沢盟済社入被頼持参、右証券廿一日おまき殿被参相渡ス

日おまき殿被参相渡ス

一、右入社深沢マツ分も十九日ニ渡ス

廿二日 一、賀川ヨリ六月十日神戸ヨリ六月廿九日長崎より出候書

状ノ返事今日長崎え出ス

卅日 一、渡辺三人出京、今日午前出立横浜え行、出舟延ヒ□野屋

ニ泊ル、自分同所ヨリ帰ル

三十一日 一、渡辺荷物十三個港町開拓使海漕社え出シ、送状渡シ

受取書ヲ取、右帰りヨリ十二時之氣車ニ而横浜渡辺

方え参ル、今日モ出船延ヒ泊ル

(欄外)

「八月一日 雨天 一、今日モ延ヒ横浜ニ泊リ

二日 雨天 一、同断

三日 一、今午前乗込ニナリ、十時過宿ヲ出、兵庫丸え乗込、午後三時頃出

帆致ス

一、自分舟迄送り、居所定リ、夫より陸え戻リ、昼飯終へ、三時三十

分之氣車ニ而戻リ帰宅致ス

一、前橋長屋ト高橋え出立之事書状出ス

五日 一、塚本銀行え行

四日 一、大久保学而塙国ヨリ今日帰宅致ス

九日 一、誘中野梧一二被連箱館え今日出立之由、依而渡辺え届物都合五封

昨日迄二追々二頼「」

九日夜 一、渡辺ヨリ電信ニ而今八日着ト申来ル

十日 渡辺え着ノ悦書状ヲ出ス、五日ニモ出ス

十日 渡辺着之事、高橋長屋えハカキヲ以申遣シ」

(葉診表欄への書き込み)

「五日 おけい来り、松岡より差越候六円相渡ス、其段国太郎えも十日ニ申遣ス」

九月十月

(入金高)

八日 ★一、四円 イセヤヨリ、御召ちりめん裕一おとしより借入

同 ★一、二円 同、お玉こんカスリ帷子壺

十七日 一、三十円 月給

廿二日 ★一、二円七十五錢 イセヤヨリ、男衿羽織一女同綿入羽

織メ三

廿七日 一、一円廿五錢 イセヤヨリ、男帷子二ツ

廿八日 一、七円五十錢 具足櫃共払

★一、十五円 池田より五月書替之口又書替

十月一日 一、二円五十錢 イセヤヨリ、母上様ヨリ借用帷子二紺

カスリ湯浴一メ三

五日 ★一、七円五十錢 イセヤヨリ、母上様給一単物一羽織二鼠

木綿単物一メ五

一、三円七十五錢 夜具綿重吉え払

十月十四日 一、一円九十錢 重吉ヨリ、茶碗十本其外払

一、六十五錢 新聞紙払

十八日 一、三十円 「(月給力)」

三十一日 一、九円 桐大重「」重吉え払

(出金高)

九月廿二日 一、五円 イセヤえ、七月九日入給其外四品出シ八月

廿四日母上様拝借一円五十錢ノ内

一、三十銭 返上

一、五十銭 沼津え

一、二十銭 寺え香奠

一、二十銭 十一月一日返上

十月廿四日 一、二十五銭 八月廿四日中野ヨリ三円借ノ内返ス、

但和多田え当月ヨリ月々廿五銭ツ、中

野より送ル、右え差向ケ遣ス

一、七十五銭 十一月十二月沼津え送り、区入費静岡

え、残り二円

一、十五円 池田より五月書替又候書替

（事故雑記）

十月二日 一、遠藤え朝参ル、窪田え大久保え参ル

一、専三郎病氣ニ付、銚子より茶山浅草より良吉参り一

泊ス

五日 一、遠藤え行、清光え参ル

一、茶山昨夜参り、今朝出立帰る

一、良山夕刻参り、当分居候積り

七日 一、遠藤来ル

一、宮寺村本橋ヨリ過日申遣候専三郎衣類差越ス、受取之ハ

カキ差立ル、本橋番地二十二番地

十一日 一、専三郎見廻り巡查来ル

十二日 一、遠藤え参り、専三郎全治之届書認貰、直ニ署并区役所

え出ス

十日 和多田え向、重四郎二度ノ返事出ス

十三日 一、巡查来、壺扶斯病ノ札ハカシ来ル

十一月十二月

（入金高）

一日 一、三元 イセヤヨリ、スキヤ羽織男女単物メ三

四日 ★一、三元 イセヤヨリ、上田男給八丈女同メ二

同日 ★一、三元 イセヤヨリ、男給一女帷子二メ三

八日 ★一、五十銭 中野ヨリ

九日 ★一、五円 奥田ヨリ

十日 ★一、一円 中野ヨリ

十七日 一、三十円 月給

廿五日 一、三十円 荒井ヨリ借用

十二月

一、三十円 荒井ヨリ借用、昨十一月五月書替此度書替

三日 ★一、一円 イセヤヨリ、鼠帷子地遣シ

一、一円 久留ヨリ到来

五日 ★一、五円 塚本ヨリ借

九日 ★一、四十円 荒井ヨリ借用

★酒巻公債証書六十円借用抵当ニ入、午二月十二戻ス

★一、二十円 小野ヨリ借用

廿四日 ★一、十円 塚本ヨリ借用

廿五日 ★一、四十円 トル四ツ遣シ、荒井「」

廿八日 一、四十円 書物□代、但五円大谷木え礼金

廿九日 一、四十三円五十銭 光忠刀払、外三円大竹え礼、三円

五十銭本阿弥トキ代、

メ二百廿五円五十銭

（欄外）

「十二月十日 ★五円五十 イセヤ男小袖」

（出金高）

十一月一日 一、四円 六月八日入メイセン小袖更紗下着出ス

同四日 一、四円 六月四日入羽織給二ツメ三出ス

十一日 一、三円 近藤忠恕え用立

十二月

一、二円五十銭 亥ノ十一八日入亀縮表地鼠縮出ス

一、五円 イセやえ元金入出ス、小袖下着共平袴引トキ、辰一

月入

一、三円 イセやえ元金入、長小袖一已五月八日入ヲ出ス

一、五円 イセやえ元金入三品出ス、女羽織小袖長胴着

十二月二十九日 一、二十円 小野ヨリ借用、清雄ヨリ返済

一、十円 八月外山ヨリ二十円借内、清雄ヨリ返ス

三十日 一、五円五十銭 十日入イセや男小袖三、清雄より出ス

# (事故雑記)

十一月三日 一、安藤病死

十日 一、星野又右衛門病死、十一日書状出ス

十四日 一、りか国え九日来ル返事ヲ出シ、来春帰国之事申遣ス

廿日 一、沼津え書状出ス

十八日 一、久留氏着

廿一日 一、塚本氏着、久留氏荷物持越シ土蔵え入

八日 一、印刷局ヨリ着ノ報知アリ

十二月一日 久留氏幸町え引移ル

十二月

一、静岡原籍協議費十二月五日迄ニ可相廻

中野 川村 川村 大久保 大久保 倉地 此分一封二而

鷹匠町戸長役場え向出ス、右戸長水落町東西草深町戸長宛

ニ而出ス、右等閑居翌三月廿二日出ス

# (薬診表への書き込み)

「廿八日 一、福恵秘笈大小本箱二個入七十六冊、右代七拾円大学校え御買上、

兄上売主ニ而代請取、兄上二十円、大谷木十五円遣ス」

明治十五年 一月二月

(入金高)

一、拾円 一月中度々ニ清雄ヨリ受取

一、拾五円 塚本逗留費トシテ受取、一月廿六日

一、三円 衣類代トシテ受取

十七日 ★五円 イセや 裕羽織小袖二

二月三日 一、貳拾五円 当月暮方入費トシテ清雄ヨリ受取、母上

様兄上様え上ケル分、沼津行ハ此外

二月廿八日 一、廿五円 清雄より受取、三月分前同断

(出金高)

二月十二日 一、十円 長田ヨリ廿円昨年三月借内十円八月返シ、

残今般清雄ヨリ受取返ス

同日 一、五円 奥田ヨリ昨十一月九日借、今日清雄ヨリ戻ス

同日 一、四円 昨四月玉小袖遣シイセやヨリ本日出ス、清雄ヨリ

受取

廿日 一、四十円 荒井ヨリ借用証書抵当出ス、清雄ヨリ受取

廿三日 一、十円 真一郎より十二年一月借、半亥三月返シ残り本

日返ス、前同断

三月一日 一、十五円 池田より昨十月書替ノ元利、本日清雄ヨリ

皆済

(日記記事なし)

三月四月

(入金高)

廿日 一、三十円 清雄ヨリ受取、二月当月ニ而不足相立別ニ渡し

呉ル分

四月一日 一、三十円 当月ヨリ此高受取

（出金高）

三月三日 拾五円 イセヤえ、寅十月三十日入小袖羽織帯反物単物

袴出スメ十二品、拾円右ノ利子、二月迄

一円廿五銭 同家、卯一月十一日入博多絵織一反、

九十五銭右利同

二円 同家、四十八銭利、已五月廿三日入沙後御紋付袴

金巾羽織二ツ出シ、倉地え返ス

五円 同家、已四月三日入羽織小袖下着女布子四品出ス、

一円十銭右利、二月迄

二円五十銭 イセヤ元、四拾銭利、白羽二重袴倉地より

借、已七月十四日入ヲ出シ返ス

一円廿五銭 同、廿銭利、已七月廿七日入母上鼠縮メン

綿入羽織拝借返上

二円七十五銭 同、三十三銭利、已九月廿二日入羽織三

出ス

一円 昨十二月三日帷子地鼠紋付、六銭右利

五円 拾羽織小袖二、一月十七日入、廿銭利

一、三十円 十一年五月七日外山ヨリ借之分返ス

イセヤノ分メ

元四十五円七十五銭、利十三円七十二銭、元利メ五十九円四十七銭

（事故雑記）

三月十八日 一、国太郎え文通出ス

十九日 一、銃四郎え状、和多田え出ス

廿三日 一、一円五十銭和多田え時計代差立、但五円ハ先達而宮重

氏え上ケ

三十日 一、清雄本日五十銭日給増被下賜

四月四日 一、国太郎郵便一封差出ス、二銭

十日 一、同人え端書出ス

十一日 一、同人ヨリ昨日出ニ而松岡え之証書調印差越ス、直ニ端

書ニ而受取遣ス

十四日 一、清雄病氣引之処、平素篤志勉励ニ付日給被下候示令下

ル

一、清雄借家七百五十円ニ而買入之約定致シ、五十円手附

渡ス

三十日 一、四拾円 高橋え持参、渡辺ヨリ返金ト申渡ス

一、四拾円 富彦え八十円ノ半金返し届

一、六十七円五十銭 倉地元金七十五円ノ利滞十年七月ヨ

リ十四年十二月迄ノ分、二月清雄ヨリ送ル

三十日 一、五円利九十銭入 国光脇差昨七月越前やえ遣し置ヲ出

ス

．．．．．（仕切り線）．．．．．

十五日 一、清雄熱海え局長ニ被連、昨日被申付本日七時気車ニ而

出立

三十日 一、同人本日中帰り致ス

四月三十日 一、川目高橋沼津行、何レモ渡ス

五月六月

（入金高）

三日 一、廿円 口々濟方ニ清雄より受取、但内金也

五日 一、廿円 塚本地所御買上代ノ内借用

十八日 一、十円 同断

十九日 一、三十円 同断 沼津行

廿四日 一、五十円 同断 同断 内四十円ハ成瀬借用之分  
廿一日 一、十円 同断 暮し方ニ  
廿九日 一、十円 七十八三ツ 同断 引越入用之口え  
一、三十円 同断 右二十五日二十七日

六月

一、三十円 おとしヨリ昨日受取

十七日 一、五円 同断

廿一日 一、五円 同断 右近藤忠恕え用立、請取書取置

廿三日 一、五円 おとしヨリ受取

廿九日 一、十五円 おとしヨリ受取

(出金高)

五月三日 一、元二円、利四十銭 已七月廿七日入玉給単物単羽織

張替ノ三

一、元四円、利六十四銭 同九月八日入としヨリ借御召

拾当人え戻ス

一、元七円五十銭、利一円五銭 同十月五日母上様ヨリ

拝借給単物羽織ノ五品

一、三元、利三十六銭 同十一月四日上田八丈給ノ二

一、三元、利三十六銭 同玉給帷子三

ノ元拾九円五十銭 利二円九十一銭 合金廿二円四十一銭

六月三日

一、元金三元、利壹円廿銭 辰十月八日夏羽織帷子お長

帷子張替物一反ノ四

一、元四円、利八十八銭 已七月廿七日帷子単物ノ四品

一、元一円廿五銭、利廿二銭五リ 同九月廿七日男帷子

二品

一、元二円五十銭、利四十銭 同十月五日帷子単物ノ三

一、元三元、利四十二銭 同十一月一日夏羽織単物ノ三  
ノ元金十三円七十五銭 利金三元十二銭五リン  
合金十六円八十七銭五リン、内十一円十二銭五厘持参、不足ハ右之  
内左之品遣ス、此金ハ塚本借用之内

(付箋)

「六月三日 ★一、元金三元 夏羽織帷子張替物ノ四品遣し

★一、元金二円七十五銭 女帷子ノ二ツ遣し

合五円七十五銭 此金ヲ以上ノ本文ニ足ル」

(事故雜記)

五月四日 一、清雄三十日中帰り、本日又候出立致ス

六日 一、四日出書狀舟田より昨日到来本日返書出ス、おけいより

モ同断ニ付返書出ス

十五日 一、十三日出舟田書狀到来

十六日 一、舟田え書狀出ス、江原同断 三銭

廿日 一、同断 江原え同断 三銭

廿二日 一、同断 同断 切符四十廻シ

廿五日 一、同断 同断 五十円切符入 昨夜成瀬入来

廿六日 一、清雄本日熱海え出立致ス

廿九日 倉地宅借用引越ス

三十一日 舟田より書狀并建部受取書為見ニ差越ス、廿八日出

六月一日 一、野中のふ「」え出立

一、箱館熱海え書狀出ス

七月八月

(入金高)

四日 一、五円 請取

九日 一、六円 請取

十四日 一、十円 請取

廿日 一、十円 荒井より金トルニツ遣シ

十八日 ★拾五円 イセヤヨリ、八丈衾小倉袴仙台袴裏共引トキ越

後反物横縞帷子洗張反物八丈小袖メンメイセン  
綿入羽織シス呉呂羽織たま茶チリ綿入羽織メ九  
品、此金ヲ以、下ノ十五円ヲ払

十四日 ★一、一円 イセヤヨリ、サイミ一反永持ノヲイ、右今日  
出シカヤ反物貫残り遣ス、十八年三ノ四日流  
ス、

三十一日 三十三円 受取

八月十四日 一、五円 おまつより預リ清雄方え渡ス

廿九日 一、十円 受取

卅一日 一、二十円 同

（出金高）

七月十四日出ス 一、元二円廿五銭 一、利二円二銭五厘 寅十月

三十日入、かやサイミ二反長持ノヲイメ四品

同十八日出ス 一、元三円 一、利

十二年八月十二日入、帷子三

一、元二円 一、利

十四年九ノ八、たま紺帷子

一、三元 当六月三日入 一、利 同日入

たま羽織婦元羽織帷子三

一、二円七十五銭 一、利

とし長帷子

四口 元拾円「」 利四円十七銭 メ十五円二

銭

八月三日 一、元二円 一、利一円三十六銭

卯十月入、縞紋付帷子明石同明石横縞帷子メ三、右  
出シ、此金清雄より受取出ス

（事故雑記）

七月二日 清雄熱海より帰ル

五日 箱館え返事出ス

六日 高橋え一円利分ヲトリノ残り遣ス、五十銭ハ前ニ遣し置

八月十一日 一、昨日賀川より西海日報到来ニ付礼ノ端書今日出ス

九月十一日 一、箱館長崎え書状出ス

九日 一、吉田箱館え出立品川迄送り

一、清之助方方尋

十日 一、江原婦沼出立、新橋迄送ル

十五六日頃 一、同家え書状出ス

廿二日 一、沼津え和多田書状出ス

廿三日 一、大坂近藤え端書小河原村え封状出ス

廿五日 一、能勢え書状出ス

廿三日 一、沼津え端書出ス

廿八日 一、廿三日出和多田一円入書状届

三十日 一、右返事出シ、江原ヨリ本日書状来リ右返事モ和多田之  
状え入廻ス

九月十月

（入金高）

九月十二日 一、十円 受取

十六日 一、五円 受取

廿四日 一、三元 受取

廿七日 一、三元 イセヤヨリ受取、但明石帷子ニスキヤ女同メ三

十八三ノ四流ス

三十日 一、三十円 受取

十月六日 一、七円 受取

十五日 ★一、二円五十銭 いせ屋、男女単物二、十六年五ノ

三十一日出ス

十六日 ★一、三円 前同断 同 夏羽織二たま八丈袷夏羽織メ四

同日 一、二円 受取

十四日 一、四十銭 受取

十六日 二円

廿三日 一、一円廿銭 長より

廿四日 一、一円廿銭 りかより

廿六日 ★一、五十銭 おとしより受取

★一、五十銭 受取

三十日 一、三十円 受取

(出金高)

(なし)

(事故雑記)

十月廿九日 一、沼津ヨリリートル廿五日出ニ而差越ス

十一月二日 一、右返書出ス、右代九十銭ハ中野え廻シ呉候様申来

ル

十一月十二月

(入金高)

十一月七日 一、二十円 佐藤より借用、塚本用ニ向ケ

十五日 一、二十円 近藤より此方え預リ、内六円箱館え送ル

廿日 ★一、七円 イセヤヨリ、母上様羽織二ゆかた三帷子一拾メ

七品

十二月四日 当七月夏服十五円丈ケヲ出スタメ冬物九品遣し、右冬

物之内左之四品出シ元利済、残り五品左之通新キニ入  
レ

★一、七円 袴ノ引とき越後一反子ス呉呂合羽織メ五品

遣ス 十八三ノ四流ス

★一、一円七十五銭 古帷子二ツたま単羽織入レ、此二

口ノ金前書四品ヲ出スタメニ直イ

せ屋え入レル

廿日 一、五円 来月之内清雄より受取

廿七日 一、五円 同断

一、五円 同断 塚本氏利分之口

三十一日 一、十円 来月之内請取

(出金高)

十二月四日 一、七円五十銭 イセヤえ入金、上ノ衣類四品出ス為、

内沓円廿五銭ハ七月ヨリ十二月迄ノ

利、此金清雄より受取

(事故雑記)

十一月十五日 高橋より利金出来兼候旨申越ス、翌日少しモ出来不

申哉ト申遣し候処、少も出来不申旨十七日ニ申越ス

廿三日 田辺伊兵衛より催促之状差越ス

廿五日 一、高橋同道田辺え参リ、利分廿一円持参、利札請取帰ル

廿六日 日曜

廿七日 一、東京府え出、利子請取持帰り

廿九日 一、箱館え公債証書之事ニ付書状差出ス

十二月六日 一、野中氏来□塚本買物代之内十円持参

八日 一、本日ミツ事はる引取

十二日 一、渡辺公債証、高橋証人ニ而五百円ヲ三百五十円ニ而預

ケ有之ヲ、今度おけい殿預り之事ニ熟談、本日高橋同道伊兵衛方え参り、おけい殿より請取候、右金円相渡し証取請取帰り之上おけい殿え相渡候也

一、高橋え、おけい殿より二十円本日貸付ニ相成、利廿円ニ付廿五銭之割

十八日 一、百円 おけいより借用、清雄え渡ス

一、おけい左門町ニ而家作買入約定金昨日五円相渡サレ、今朝帰宅

十七日 一、長崎え書状出ス

十二月廿一日 一、静岡原籍協議費本年より三十銭増額ニ而十日迄

ニ差出候様去月廿八日出郵便ニ而戸長役場より

達シ越候旨中野ヨリ順達ニ付、左之九名連署本

日郵便ニ而差立ル、戸長ヨリハ中野清雄渡辺富

彦四名ニ而来ル

中野 川村 渡辺 川村 大久保 倉地 大久

保 荒井 勝田

九名合金二円七十銭、書状上封は誘清雄兩名ニ  
而出ス

荒井勝田原籍ハ安西壺丁目南裏丁、郵便代八銭

一、此方当番地え転居届清雄改印届右封込相廻ス

廿三日 竹原復次札幌より帰り候由ニ而、箱館え寄渡辺十六日認候  
書状并写真届持参被致

廿六日 箱館え右返事兼公債之事ニ付章三え書状出ス

廿七日 午後四時五十分賀川ヨリ電報来ル

三十一日 三十円近藤ヨリ借用、清雄え渡ス

（欄外 十一月か）

「廿九日 一、近藤鯉喜磨千円公債証書当籤番号届出候様達有之、本日おけい

同道出届書、番号聞合本人印形致し差出ス、右公債証書おけい  
預ケ帰ル

十二月十二日 一、おけい東京府呼出シ状持参、中野頼おけい同道出頭、当  
籤千円ト廿五円相渡リ持帰り此方え預ケ、同十二日十三  
日おけい殿止宿」